

観るとか、月を樂むとか云うやうな事ではない、遊ぶものは職のないのであれば、乞食が遊んで居るやうなものだ、何故に人民が遊んで居るのかと聞けば、遊ぶのは一番得だからである、何の仕事に拘らず収入よりは税金の多いために仕事をするのは損をするのである、働かずに居らば税金も取られず、一番得を取る生活である、遊んで得を取る生活は即ち乞食の生活である、パレスチナの人民の一見乞食らしく見ゆるのも當然の事で、政府は乞食を製造して居るのである、政府も乞食、人民も乞食で能く似合うたものと云はねばならぬ、税金取立法を聞いて見たが、二千年前と同じで税金のやうなものがある、是は即ち税金取立受負人である、政府には規定の金額を收めて、人民からは取れる丈け取るのであれば、真に結構な職業ではあるが、人民が遊ぶやうになつては、この職業ですらも儲うかと思はれる、パレスチナの人民の益貧困に陥るのは自然の勢で、トルコ政府の下にある限りは進歩の見込があるまい、私は平生政治上の事には少しも興味を持たぬ偏屈者で、政治論などは一生涯耳にしたくもないと思つて居つたが、エルサレムに往て其零落の實況を見て、悪政府の國を災するの大なるを感じた、唯宗教的眼孔のみを以て見るつもりでも、知らず

く政事上の事までも考ふるやうになつた、早くパレスチナを悪政府の下から救ふてやり度いものだ。

(十五)

エルサレムの區劃

昔のエルサレムと今のエルサレムとは其形に於て餘程違つて居る、形とは石垣に圍まれて居る形を云うのである、古い都會は大抵石垣に圍まれたもので、是は敵を防禦する爲めであつたが、今となればその石垣も役に立たず、石垣のある爲に市の發達が妨げられ、エルサレムの道路の狭いのも、其不潔なもの、陰氣なもの、皆石垣が元因となつて居るやうに思はれる、エルサレムの石垣の位地は昔から幾度となく變はり、隨て市の形も變つたのである、シオン山の全体が石垣の中にあつたが、今はその西南の隅が石垣の外になつて居る、モリア山の南端オベールの地も、昔は石垣の中であつたが、それも今は石垣の外である、エルサレムの東北隅のベゼタは昔は石垣の外にあつたが、今は其中にある、斯の如く石垣の位地の變つたため、市の形も昔とは大に變つて居る、今のエルサレムは四角と云うよりも菱形と云うのが適當

であらう、假りに四角を畫て其西北の部分或少しく削り、それを西南に加へたならば稍や似たる形が出来る、市の東南の隅には南北に長く東西に狭い長方形の空地があつて、坪數は四万坪もあるとの事である、此處はモリア山の一部分で今はハラムと稱せられて居るが、昔の神殿のあつた處である、この空地を除けば他は皆人家を以て充されて居ると云うても善い、勿論狭い空地が他にもあるが、極めて稀である、石垣には多くの門があつて、通行の出来るものと通行の出来ぬものがある、私は唯重なる門丈けを通つて見た、市の東西南北に有名な門が一つ、ある、西にあるのをヨツパの門と云ひ、東にあるのをステバノの門と云ひ、北にあるのをダマスコの門と云ひ、南にあるのをシオンの門と云う、ヨツパの門から東に向つてハラムの境内まで達するのをダビデ街と云ひ、ステバノの門を通つて西に進むのをグイアドロ、サと云ひ、ダマスコの門から南に進んで居るのをダマスコ街と云ひ、シオンの門から北に進むのをシオン街と云うて居る、其他にも街があるが有名なものはこの四である、この四の街で殆んどエルサレム市が四分されて居ると云う事が出来る、この四つの區には各別々に名稱があつて、ダビデ街の南シオン街の西にある

一區をアルミニアン區と云ひ、ダビデ街の北、ダマスコ街の西にある一區をクリスチアン區と云ひ、シオン街の東、ダビデ街の南にある一區をユダヤ區と云ひ、ダマスコ街の東、ダビデ街の北にある一區をモハマダン區と云う、是は昔からあつた名稱ではない、多分近代に起つたものであらう、これらの四區には各名所がある、この中で最も文明に進んだ處はクリスチアン區で、最も野蠻なのはユダヤ區である、この四區に従つて御話をするのは便利であらうと思はれる。

(十六) ユダヤ區

前にも申した通りユダヤ區はシオン街の東、ダビデ街の南にある一小區域で、是處は専らユダヤ人の居住地である、隨て宗教もユダヤ教である、此處に居るユダヤ人は古風なユダヤ教を信じ、嚴重に其儀式を守り、安息日即ち土曜日を聖日となし、色々の祝祭をも守り、日常の行も皆昔のまゝである、斷食をば宗教上の大切な義務となし、年の最終の日には日の昇る三時間も前に、起床して悔改の意を表する爲に、其脊に四十に一つを減じたる鞭を受け、打たる、毎に箴言三〇十一と十二の言を口

に唱ふるの習慣がある、即ち「我子よなんぢ、エホバの懲治を輕んずる勿れその贖責を受るを厭ふこと勿れ」エホバはその愛する者をいましめたまふ恰も父のその愛する子を謹むるが如しと記された言である。

エルサレムのユダヤ人はユダヤ人中でも極めて陰氣に見ゆる、私は多くのユダヤ人を見たが、いづれも皆憂ひ顔である、アブラハムやモーセなどが決してあんな陰氣な顔を有つては居なかつたらうと思はれるが、その悲惨な歴史は遂にあのやうな人相を造つたのかも知れぬ、彼等の先祖等でも笑ふて悦ぶ場合よりは泣いて悲む場合の方が多くあつた、其境遇が彼等の容貌を陰氣に造つたのであらう、亡國の民が其人相までも變はる、ユダヤ人と印度人とが能く似た點がある、ユダヤ人が印度人程には黒くはない、顔の形も印度人のやうに圓くはない、多くは面長であるが、その陰氣な所は互に似て居る、ユダヤ人の今日の境遇も尙ほ哭かざるを得ぬ境遇で、實に同情に堪へない次第である、彼等の祖先等がカナンの地に獨立國を立たのに、其子孫たる彼等が其地に在ては恰も外國人の如くに取扱はれ、神民として榮えた民が、同じ地にありながら異教國の政府に虐待され、壓制の中に吟呻して居る祖

先の神を拜んだモリア山も今は異教徒の手に奪はれ、神殿の境内には一步たりとも踏込む事が出来ない、そこでいよゝゝ神殿を懐しく思うの情切になり、昔の神殿の境内を圍んで居る石垣の一部分を高價で買取り、其石垣に接吻して昔を偲んで泣いて居る、金曜日毎に其石垣に接吻して泣いて居る、實に惘然なものである、其石垣とは神殿の境内にある西側の石垣で、ユダヤ區に接して居る、彼等が石垣に接吻して泣く時には詩篇の七十九篇を口に唱へるのである、即ち「あゝ神よもろゝの異邦人はなんぢの嗣業の地ををかしなんぢの聖宮をけがし、エルサレムを毀ちて礫堆となし云々」との言である、また左の言をも唱へながら泣くとの事である。

荒されたる王宮の爲に

われら寂しき地に坐して泣く

亡されたる神殿の爲に

われらさびしき地に坐して泣く

云々の言で、實に其心情を察すれば落涙せざるを得ない、斯くユダヤ人が常に泣いて居るからには、容貌の陰氣になるのも無理ならぬ事である、けれども彼等の眼の悪

いのは泣いた爲ではなくして別に其元因がある、ユダヤ區はエルサレム中最も不潔である、元來ユダヤ人は斯る不潔の生活をするやうな野蠻人ではなかつたが、不運に不運を重ね、貧困に陥り、其上に精神上の快樂に乏しい爲に、其生活までも墮落したのであらう、精神上愉快を感ずれば、家の中までも清潔になるが、萬事意の如くならぬ境遇に立ちて、泣きたい事のみ續いたならば自然に衣食住にまで心を留めぬやうになる、是れ彼等が退歩して野蠻風になつた所以であらう、實に可愛い想な民である。

(十七)

アルミニアン區

この區はシオン山即ちエルサレム中最も高い部分で、ダビデの王宮のあつた處である、けれども其王宮の跡は何處であつたかを知る事が出来ない、此區は絶壁に接した片隅なれば、地勢上防禦には便利であつたが、今日では却て不便利の地となり、繁昌の出来ない部分となつて、實に寂寞を極めて居る、シオンの門があつても通る人もなく、何の爲に門があるのか疑はしい位である、私が其門を通つた時には革袋

に水を容れたのを負へるユダヤ人が一人、其處に立つて居た、其袋は羊の皮で造つたもので、頭も手も皆其儘に付いて居る、其中に水一杯容れて居れば、恰も水に溺れた羊を脊に負ふたやうに見えた、羊の頭が下の方に垂れて居たために、其口から水が洩つて居た、高價の水をあんなに洩らしつゝ立つて居るのは如何にも惜しいやうだが、彼は平氣で立留つて居た、この區をアルミニアン區と稱するのはアルミニアン派に屬するキリスト教徒の居住地であるからだ、其處にはアルミニアン教會の信者の修道院がある、私はエルサレムの石垣の外からシオン山の南端に上り、シオンの門を通つて、アルミニアン區に這入つて見たが、實に不潔な處で、シオン街と聞けば、其名は美的で、どんなに立派な街であらうかと思はれるが、物は想像したやうなものではない、こんな處にダビデやソロモンが居つたのであらうか、どう考へても眞實とは思はれなかつた名が美で實の醜なるものが世の中には澤山あるが、シオンの山も今日では其中の一である、しかし昔は餘程立派であつたものと思はれる、この區の中には祭司長アンナスの家もあつた、どの事であれば、イエスもこの區に入り給ふた事がある、何となれば、イエスの捕はれた後、兵卒がユダヤ人の下吏

と共に彼をアンナスの所に曳往いと聖書つた記されたからである。使徒ヤコブの斬首されたのもこの區の内、今は其塲處に會堂が建つて居る。使徒行傳十二〇二に「かつ刃をもてヨハ子の兄弟ヤコブを殺せり」とある。是はヘロデ王が殺したのである。この區にはヘロデの王宮があつた。この區で目に留まるものは石造の高塔で、エルサレムの建物中では最も古いものである。之をダビデの塔と稱して居る。この塔が高く聳えて居る爲に石垣の外からも見る事が出来る。何故に之をダビデの塔と名けたのであらうか。或は昔ダビデが作つたのかも知れない。もし是が果してダビデの作つた塔であつたとすれば、彼が其子アブサロムの死を哀んで泣いたのはこの塔の上である。一説には是はそれ程古いものではない。ヘロデ大王が建たものである。それは眞かも知れない。それにしても二千年も古るければ、エルサレムにはこれ以上古いものが一つも遺つては居ない。其塔のある處は今兵營となつて居る。兵營と云へば立派なやうだが、乞食の巢窟同様である。見た處では兵營とは見えないうが、折々喇叭を吹くので兵營だと氣が付く位なものである。此處に兵隊を何の爲に置くのであらう。何れ守備兵ではあらうが、外國人の輕蔑を招くより外には何の

役にも立て居ない。兵營の前には英國の教會がある。安息日に出席して禮拜式に與かり、説教も聞いた儀式は莊嚴で、エルサレムに關する預言者の言を司會者の讀んだ時には、外の處で聞くとは違つて、エルサレムと云う辭に一種不思議の意味があるやうに感ぜられた。會衆は二百名ばかりも居つたが、多くは外國人で、土地の人は極めて少數であつた。この教會も儀式は重なるもので、説教は割合に短く、別に感服する事もなかつた。唱歌は可なり立派ではあつたが、米國の教會で聞いたやうな立派なものではない。米國領事館もこの區にある。領事は博士メレルと申して餘程エルサレムに永く駐在した人で、パレスチナ通とも云うべき人である。實に親切な老紳士で、初對面の人ではあるが、恰も己れの子の如くに私を世話して呉れた。御役人でも役人ぶらず、其平民的なる點は何とも云へない程に心地善く感ぜられた。東洋の役人が閻魔のやうで、米國の役人は地藏のやうだ。こんな事を云うたら立腹するかも知れないが、私は實際そう感じたので、立腹するならばそれは閻魔の證據であらう。

(十八) モハメダン區

この區は四區の中でも最も廣い區で、回々教徒の居住地である、この區の中で最も興味ある處はグイアドロ、サと云う街である、この街は東の石垣にあるステパノの門を通つて、眞直ぐに西に向て進む處で、それはダマスコ街に達して居る、グイアドロ、サと云う意義は悲哀の街と云う事で、イエスがピラトの法廷からカルバリの刑場に至る途中十字架を負ひつゝ、この街を通つた爲にこの名が出たのである、ピラトの法廷はこの街にあつたゆゑ、刑場に往くには必ずこの街を通らずには往れなかつた、イエスの刑場の位地に就ては議論がある、口碑によれば今石垣の中にある聖墓會堂のある處だと云うて居る、學者は之を信せないが、よし其處としても矢張イエスがこの街を通らずには其處に達する事が出来ない、ステパノ門を経てこの街に入ると右側に「セントアンナ」と云うのがある、此會堂は聖母マリヤの母なるアンナに献げられた會堂である、左側は神殿の境内の入口で、其傍にベテスタの池がある、それより少しく西に進んだ左側即ち神殿の境内の西北隅に

當つた處にアントニヤと稱する城砦がある、是はイエスの時代にはロマ兵の營所で、其處から神殿の境内を眼下に見おろす事が出来るゆゑ、ユダヤ人が神殿の境内で何か不穩の事でも企てたならば、直ちに發見の出来るやうに見張をしたのである、そして大事と思へば兵隊を指向けるやうに常に用意して居つたゆゑ、この城砦はユダヤ人に取つては目の上の「たんこぶ」であつた、使徒行傳にはこの城砦を陣營と云うて居る、廿一〇、卅四に千夫の長はパウロを陣營に曳往しめたのである、是は神殿の境内からアントニヤの城内に曳入れた事で、其處に通路として階段があつた、人々がパウロを殺せと叫んで其階段まで擁迫おしよせて來た時に、千夫の長はパウロを負うたのである、またパウロが發言を許された時に、階段の上から民に向ひ手を搖して、ヘブルの方言で演説した事があつた、私はアントニヤ城砦に入つて是等の歴史を思ひ起して非常に愉快を感じた、ロマ兵の陣營であつた時には餘程立派であつたらうが、今日では建物も古くなり、政府の放任主義の爲めか不潔極まつたものだ、豚小屋同様だと私の前に申上げたのはこのアントニヤ城砦の事である、アントニヤ城砦を出てグイアドロ、サを少しく西へ進めば街の上に「アーチ」があ

る、それを「エクホモアーチ」と稱して居る、それは人を觀よと云う義で、ピラトがイエスをユダヤ人の前に曳出して「觀よこれその人なり」と云うた事がある、この「アーチ」のある處は即ちこの言を發した場處であつたとの事だ、ピラトの法庭も其處であつた、數千の人々がこの法庭に押寄せて、イエスを殺せよと叫びつゝ、ピラトに迫つた時には、どんなに混雜したであらう、私が未だエルサレムを見ざる前には、ピラトの法庭又は公廳と云う名稱から、日本の裁判所や警察署のやうなものだらうと想像し、ユダヤ人の押寄せたのは其廣い庭内で、もあつたらうと思つて居つたが、其街の狭いのを見て、こんな處に數千人のユダヤ人が押寄せ來つて、イエスを殺せよと叫んだなれば、どんなに混雜したのであらうと察し、昔も今の如くに狭かつたなれば、ピラトがユダヤ人の聲に壓せられたのも無理ならぬ事だと感じた、ピラトの法庭に入るには當時大理石の階段があつた、イエスはそれを上つて法庭に入つた、時に彼の足から流れて血が其石に印したとの事である、其階段が後ローマに運ばれ、今はスカラサンタと云へる寺院に置かれてある、ルーテルが其階段を膝で登つて苦行した時に「義人は信仰に由て生くべし」との眞理を悟つた、今でも信者が其寺に

來つて膝で登つて居るのを私が實見した、私も膝で登て見やうかと思つたなれども中々時間の入るのみならず、そんな難行苦行を眞面目に信する心がないゆゑに馬鹿々々しいやうな氣がして實行が出来なかつた、階段の頂の正面にはキリストの十字架の肖像畫があつて、それを見ながら上つて行くのは、中々宗教的眞理を巧に表したものだ、難行苦行に由てキリストに達する眞理を表したのは如何にも面白い工夫ではあるが、是は天主教の教理で新教徒の私に取つては何の難有味もなかつた、私はルーテルと同じやうに信仰に由て義とせらるゝことを信するゆゑに、難行苦行をなすの必要がないと思つて居る、それ故に其寺で膝で登るのを見て、あゝ憐れな迷信家だと思つた、私は他の階段を膝ではなく歩んで登つて、キリストの十字架の前に達した、膝で登れば十分時間も掛るものを、三十秒もかゝらずに、しかも同じ處に達したのである、是は難行苦行と信仰との相違の點である、難行苦行には時間が入るが、信仰には時間が入らぬ、キリストの血痕のある石段は下から二段目で、今は板を以て其石の上を蓋うて居れば見る事が出来ないが、金屬で圓い形の表徴しるしをつけて置く、この階段をピラトの階段と稱するのは、ピラトの法庭から運ん

だためである。

此のツイアドロ、サと稱する街は中々有名なもので、エルサレム中にこれ以上の有名な街はない記憶し難い名ではあるが、記憶せずには居れぬ街である、イエスが十字架を負うて刑場に進んだ時、其重さに堪へかね、クレチのシモンが彼に代つて十字架を負うたのもこの街である、この街で起つたこと、云はれて居る一つの物語がある、それは勿論歴史的事實ではなくして、想像談ではあるが宗教的真理を巧みに表して居る、自分が面白いと感じたから序でに御話をするのである。

私は佛京パリのルーヴルの博物館で一つの油繪を見た、それはイエスの十字架を負うて刑場に往く途中の状態を描いたものだ、重き十字架に壓せられてイエスの疲れ果たるにも拘ほらず、イエスの腰に結んだ繩を兵士が引張つて無理に進ませて居る、弟子のヨハチや、母のマリアや、其他の婦人たちは泣きながら其後に附き従ふて居る、婦人の一人が手拭らしきものを手に持て居る、それには人の顔が描かれて居て居た、そこでこれは刑場に行く途中の事であらうが、この手拭に顔の描かれて居るのは何の事を意味したものであらう、聖書にはそれらしき事は何も記されて居

ない、勿論口碑から起つた事ではあらうが、其口碑の意味が私には知れない、私と同行した美術家に聞いて見たが知れない、外の事であつたならば知らずとも氣にも掛らぬなれど、イエスの一身に關した事しかも意味あるらしき事柄を知らぬとあれば、専門家が自分の専門の事を知らぬやうなもので恥しい氣がする、其後何分にも氣にかゝつて居た、其繪を描た美術家が知つて居るのに宗教家が知らぬと云うのも餘り残念である、或は私のみ知らなかつたかも知れぬ、さすれば愈残念な事である、然るにエルサレムに往つてから漸く知る事が出来た、知つて見れば六ヶ敷き事でもなかつたが、餘程面白く感じた、それはイエスがツイアドロ、サを十字架を負ひつゝ、進んだ時に、疲勞の餘り汗が顔より地に滴るばかりに流れて、傍に見て居つた信者がその苦さを見兼て、そつと手拭を取つてイエスの顔の汗を拭うたところ、其手拭にイエスの顔が其儘印象されて、いつまでも残つたとの事である、是は想像談ではあるが、イエスに同情を表した爲に其顔の印象を受けたとの事は心靈的の意味に解すれば、無量の妙味がある、信者は皆キリストの像に化することを願うて居る、是は信者の理想である、この理想に達する唯一の道はキリストを愛する

事である、手拭にキリストの顔の印象されたのは想像談なれども、我等がキリストの苦難を思ひ、之を察して其汗を拭ふの心を以て、生涯キリストを愛さば、我等の心にキリストの像の印せらるゝは疑なき事である、これはヱイアドロ、サを見た時の私の感じであつた、この街も甚だ狭く、幅が二三間もあらうか、石を以て敷きつめて居れば、中々堅固な道路であるが、狭い爲に薄暗く感せられた、今日では道の左右皆寺院であつて、商店などは一軒も見られない、實に陰氣な街であるが、興味の深い街である。

(十九)

クリスタン區

この區はエルサレム中で最も文明的の部分で、また最も繁華な場處である、其中でもヨツパの門から眞直ぐに東に通つて居るダビデ街は最も繁華で、エルサレムの銀座通と申して善い往來が頻繁であるのに、道路が狭いから通行も出来ぬほどで、急用でもあつた時には其街をば通られない、人間ばかり通行するのではなく、驢馬が荷物を負うて其狭い街を通るのであれば、折々驢馬同志衝突する、荷物が脊より

落れば誰が悪いと云うて喧嘩が始まる、そこで往來止めとなる、私が一寸往てもそんな事を見たユダヤ人の喧嘩は始めのことなれば立留つて喧嘩を見て居つたが、言語のわからぬ爲に少しも面白味がない、全く動物の喧嘩を見るやうだ、毎日こんな喧嘩して居つては仕様がな、是は双方共悪いのではない、全く道路の狭い爲めであれば、エルサレム市其物が責任を負うべきである、市區改正でもすれば喧嘩が止むのであらうが大昔から道路はこの通り狭かつた、今後も市區改正などの起りやうもない、數千年間毎日のやうに喧嘩があつたらうが、今後も幾万年となく喧嘩が續くのであらう、市街の人心に及ぼす影響も大なるものだ、エルサレム住民の不人情なるのも、全く市街が興つて力がある、東京市の人々の寛大なるは道理あることで、市區改正の進むに従つていよいよ人心の改良も出来るであらう、眞に結構な事である、この區を通行して甚だ不快に感ずるのは商人が客を捕へて押賣をする事である、外國の旅客と見れば必ず捕へらるゝ、捕へられたとて必ず捕虜となる譯でもないが、實にそのうるさいのは閉口する、幾十人と云う商人が居つて、それに一々捕へられて御覽なさへ、閉口せざるを得ない、先方がそれで生活するのであれ

ば、熱心に旅人を捕へるのも無理ならぬことだが、我々の身に取つては一方ならぬ迷惑である。それ故に私は出来るだけダビデ街を避けることゝした。けれども一度は捕へらるゝ覺悟で是非通行して見るの必要がある。ユダヤ人の喧嘩は他の處では容易に見られない。賣品はどんなものかと云へば、勿論日用品もあるが、それは比較的になくして、旅客を相手にする土産物である。橄欖樹で造つた器物、具細工、繪端書、西洋婦人の身につける色々の飾物などで、中々美しい物がある。果物では蜜柑、棗栗などが澤山あつた。パン、菓子などもあつたが、逆でも喰べられそうもない。パン、菓子も不潔であるが、賣手の不潔な顔を見れば、買ふ氣にはなれない。エルサレムの銀座通ですらも斯く不潔で、あればダビデ街と云う名稱が適當しない。紳士らしき人としては一人も見えない。けれどもあの不潔な人間がエルサレムの紳士ならば、往來する人が悉く紳士のみである。往來する人々の中に婦人も稀れにはあるが、悉く男子のみと云うても善い。紳士がこんなにあるからには淑女もあるべき筈だが、見る事が出来なかつたのは残念であつた。

この區で舊跡と云はれて居るものは非常に有名な、チヨーチオブホーレセブルカ「ル」である。是は前にも申し上げたので、即ち聖墓教會である。口碑によればこの會堂のある場處はイエスの刑場でもあり、また墳墓の地でもあつたとの事だ。此地からは三つの十字架が掘出され、其中一本が病を癒すの力があつたとの事で、それはイエスの十字架たる事が知れた。斯る事よりして此處がイエスの十字架に釘られた場處であると信せられ、コンスタンテン帝の母ヘレナがパレステナに來つて、此地に會堂を建立する事となつた。此地が墳墓の地でもあつたと云うので、食堂の名稱を「ホーレセブルカ」と云うたが、此地はそんな歴史のあつた地ではなく、全く迷信の集つた場所である。口碑によればアダムの墳墓も此地である。アブラハムがイサクを献げたのもこの地である。何んでも面白味のある歴史は皆この地で起つたやうに云うて居る。始から私がこの地を信用しなかつたから、見物するの心もなかつたが、それでも千六百年間も斯る事柄の起つた聖地と信せられ、この地をキリスト教徒が手に入れんとして、十字軍までも起した程の事なれば、兎に角歴史の場處となつたのである。キリスト教國の巡禮が皆この地を指して集るので、パレステナ中この地程神聖な處は今ではないゆゑに、一寸でも覗いて見やうかと思つて會堂

の中に這入つたが見れば見る程聞けば聞く程馬鹿々々しい感じがする。この會堂は色々の會堂の混合した一種奇怪の會堂で、天使ミカヘルの會堂もあれば、マグダラのマリヤの會堂もある其他使徒ヤコブの會堂もある、會堂の入口を這入ると間もなく正面の處に、平面の石が置かれてある、床よりも二三寸も高くなつて居るが巡禮が其石の前に跪いて之に接吻して居た、イエスの死体に香物を塗つた時に、其石の上に死体を載せたとの事である、斯る歴史があるので其石が難有いとて接吻して居る、どう見ても全く偶像教的の習慣で、到底キリスト教的の習慣とは思はれない、其石より少し離れてイエスの死体に香物をそゝいたのを母マリヤが傍觀して居つた處もある、どうしてそんな事が知れたであらう、實に不思議な事である、この會堂内にはイエスの墓の入口に轉ばした石もある、口碑によればアダムもこの處に葬られたとの事である、イエスの十字架に釘られたる時に其血が流れて岩石の裂目よりアダムの頭に注がれたため、彼が甦生したとの事である、甦生した後どうなつたか其邊までは聞く事が出来なかつたその岩石の裂目は今でも残つて居る、斯る不思議の事件の起つた處なれば、信者の難有く感ずるのも無理ならぬ事だ、

レステナに來る萬國の巡禮は皆この聖地を目的として集るなれども東洋の極から往つた巡禮のみが、この地を迷信の塊より場として一笑に附した、萬國のキリスト教徒が皆だまされて難有味を感じて居るが、日本人のキリスト教徒が容易に難有味を感じない、昔からの口碑のあるにも拘はらず、學理的證據を要するなど、六ヶ敷いことを云うて口碑を退ける、日本人程取扱ひ難いものはなからう、この地の贗物である學理的證據は後に申上ぐる積である。

(二十) 神殿の跡

エルサレムで最も興味深い處は昔の神殿の跡であ、是は既に申上げた如く、モリヤ山の上でエルサレム市の東南隅である、昔の神殿の壯觀を極めた事が、聖書の記事からでも想像が出来る、弟子の一人が神殿を指して「師よ觀たまへ此石この殿宇いかに盛んならずや」とイエスに云うた、イエス之に答へて「爾曹この大なる殿宇を見か一の石も石の上に圮れずしては遺じ」と云うたその預言の通り今は一つの石すらも其跡に遺つては居ない、エダヤ教の中心となつたこの聖所も今は異教徒の

手に歸し、神殿跡には「モスクオブオーマル」と稱する回々教の堂宇が建立されて居る。其境内をハラムと云うてマホメット教徒に取つてはメツカのアーバに次ぐべき聖處である。コランに依ればマホメット自身もこの聖處を訪うたとの事である。この境内の廣さは西側は五百三十六ヤード、東側は五百十八ヤード、北側は三百五十一ヤード、南側は三百九ヤードである。マホメット教徒の外はこの境内に入るを

許ない、政府の認可を経ればキリスト教徒でも入る事が出来るとの事である。私が知らずにするに、境内に進んで往つたところが、門番らしき人に遮ぎられた。何事をか云うたなれども一切私には了解が出来なかつたが、遮ぎられたからには其意を察する事が出来たけれども、斯る聖所を見ずに歸るのも残念なれば、其門を去つて他の門へ往つた。其處にも番人が居ならんと思うたが幸に居なかつたので通る事が出来た。前の門が正門だと見える。私は勝手口から這入つたのである。叱られた處が構ふものかと、膽立ちまぎれに這入つて見たが、中々廣々とした處である。其外エイエスの屢次説教された處が此處である。奸商を逐出した處も此處である。其外エダヤの王等や預言者等も皆此地に足を入れたので、特にアブラハムがイサクを献

げた當時を想起して此地を見れば、去るに忍びない程昔が偲ばれた。昔の神殿の跡には立派な堂宇が建られてある。其形は八角で一角の廣さ六十六呎之を八つ合せた周囲が八十間餘もあれば、其大きさを想像する事が出来る。堂宇の中央には昔から遺つて居る大石があつて、口碑に依ればサレムの王メルキゼデグが犠牲を献げた石であるとの事だ。またアブラハムがイサクを献げたのもこの石の上だと云はれて居る。契約の櫃も同じくこの石の上に安置された。この大石の下には洞穴があつて、アブラハムやエリヤなどの祈禱を捧げた處だと云はれて居る。マホメットの言に、この洞穴の中で捧げた一つの祈禱は他の場處で捧げた千の祈禱にも優ると、私が其洞穴で祈る事の出来なかつたのは残念である。マホメットがこの洞穴から昇天したとの事で、其證據として石に圓い孔が残つて居るが、其孔を通つて昇天したとの事である。何も石を通つて昇天する必要もないのに、随分物好きな人もあつたものだ。

ハラムの構内の西南隅に更に一つの堂宇がある。その名をアクサと云うて居る。昔シヨステニアン帝が處女マリヤの爲に建立したものだ。其後屢次建換へられて、

今は矢張マホメット教徒の手に歸して居る。

ハラムの構内に入るには澤山の入口がある、北側に三つ、西側に七つ、南と東の西側にも門があれども、閉ぢられて居る、東側の門をゴールドンゲートと申して居るアラビヤ人は之を永遠の門又は悔改の門と云うて居る、或人は使徒行傳三〇二に記され居る美門うつくしき門とはこれであると云うて居るが、それは誤であつて、美門は神殿の境内にある門を指したものである、このゴールドンゲートも亦閉ぢられて居る。

(廿)

エルサレム概観

エルサレムはまだく面白場所がありませんが、時間の短い爲に充分の視察が出来なかつた、今之を概括して云へば、エルサレムの市は案外に狭く、石垣の周圍は二マイル半に過ぎない、見た所では青山の練兵場位のものである、一つの都會としては物足らぬ程狭い、昔は之よりも遙かに大きなものであつたらうと思はれる、今日この狭い割合に人口が多い、凡そ四萬人もあるとの事である、ハラムの四萬坪の空地を除いた残りの部分に四萬程の住民があるからには、人家の稠密の度も推察さ

れるであらう、是は昔も今も同じことで、聖書に「エルサレムよなんぢは稠ひくつらなりたる邑の如く固くたてり」(詩百廿二〇三)とある、石垣の内は人家で埋つて居る、家と家とが密接して居れば、エルサレム中残らず屋根渡りする事が出来る、屋根は皆平坦で休息に便利である、私が或家の屋根にまでも登つて見たが、周圍に欄干が在て少しも危険ではない、納涼や觀月には便利な場所である、景色も美はしければ、空氣も清く、風も涼しければ、閑靜でもある、休息場としては此上ない處であるが、私は寒中に登つたのであれば、何人も休息しては居なかつた、ユダヤの習慣として人々に布告するには、屋根の上のぼつたのである、是も善い工夫であつた。

エルサレムで甚だ重寶な場所は門である、門が澤山あるが私の通つた門はヨツパの門、ダマスコの門、ステパノの門、シオンの門の四つである、是等の門は皆石造で堅固なものである、門を出つれば、廣小路がある、多くの人々が其處に集つて、夏は納涼の場所となし、商人は之を市場となして居る、昔から門に集會する習慣があつたので、裁判までも門で行うた事がある、門は集會所なれば、智慧が門で叫ぶと云うのも適當の事である、ヨツパの門は最も繁華で、ダマスコの門は其次である、ステパノの

門やシオン門は兩ながら極めて寂しい、ヨツパの門の傍には石垣を取崩して廣い新道を開いた、斯る計畫は往來には便利であるが、エルサレムの舊觀を損することなれば、餘程慎むべき事であらう、けれども是には別に理由があつた、近年獨逸皇帝がエルサレムに御巡幸になつたので、帝の御通りの爲に罷々この道を開いたのである、如何に皇帝だとしてこんな準備を命じたのでもあるまい、多分トルコ政府の行届きすぎた爲めであらうと思はれる、古い狭い門を通つてこそ、パレスチナにも往つた氣がすれ、こんな新道を通つてエルサレム城に入つたのは、獨逸皇帝の聖意ではなかつたらうと察せらるゝ、けれどもトルコ政府では歓迎の意を表する爲に、新道を開いたのであれば、志は感心だが、實に不注意であつたと思はれる、たとへ一時新道を開たとしても、再び以前の通り、石垣を築くべきであらう、然るにその策を取らずに、其儘にしたのは、或は之を以て獨逸皇帝行幸の紀念とでもする積かも知れない、エルサレムの貴き所以は他に在るてはないか、獨逸皇帝行幸の有無はエルサレムの光榮を増減するに足らぬ、私はこの新道の開かれたのを見て、エルサレムに取つての一方ならぬ負傷だと感じた、斯る負傷をエルサレムに與へたのは、獨逸皇帝

の聖旨ではなからう、兎に角何人の罪としても、エルサレムの爲には悲むべき出来事で、江戸城の石垣を取崩して凱旋道路を開いた事と同様の失策である、私は一度も其新道を通つた事がない、何時でも罷と避けて古い狭い門を通ることゝした、多分十回以上も其門を通つたであらう、王の爲に開いた道は王の通るべきものだ、私は王でなければ常に狭い門を通つて其新道を通るまいと覺悟した、ヨツパの門を通る時には、其往來の頻繁なるが爲に、不潔の人間に觸れるかと思つて、遁げるやうに其間を通り抜けた、實にユダヤ人の不潔は幾度見ても不潔と感ぜざるを得ない、あんな人間と肩を相摩するのは不快である、それでもヨツパの門の邊は中々文明的で、靴磨が路傍にひかへて居る、私も磨かせた事があつたが、中々御世辭が善かつた、日本の靴は立派だとほめて呉れた、それは立派な筈だ、七圓も出して注文した靴であれば、ユダヤ人の靴とは雲泥の差で、自分なからも立派だらうと云ひ度い心は山々であつたが、そうも云ひ兼ねで、こんな靴は日本では悪い靴だと云へば、否々と云うて革に手を付けて承知しなかつた、磨き賃が一定しない、志次第で何程でも善いとのことなれば、氣張つて澤山呉れてやつた、先方では意外に多かつた爲めか、

深く禮を云うた實は多く與ふる積でもなかつたが、勘定が出来ないから餘儀なく、手に握つた丈け與へたのである。澤山呉れた代りに一回しか磨かせなかつた、ほめられ賃と思へば善いやうだが思へば惜しいやうな氣もする。

ユダヤ人のみならず、この市に住んで居る人々が一般に不潔なのは、其元因水の不足の爲である。エルサレムは山であれば甚た水に乏しい地である。井があつてもそれすらも少ない、それ故に雨水を溜めるか、又は遠方より汲んで來るのを買ふのである。水の儉約は即ち金の儉約なれば、飲用丈けには水を消費するも、顔を洗ふことなどには儉約すると見ゆる。二度顔を洗うものも一度にする途にはその一度も儉約するやうになる。洗うたとして立派な顔でもなければ、年に一度位顔を洗うとの事だ、それでは不潔になるのも當然の事である。たとへ諸君のやうな美しい顔でも一年一度洗うのみではユダヤ人のやうに不潔となる。ユダヤ人を悪しく評するのは氣の毒でもあるが、其不潔なるは顔のみではない、其精神までも腐敗して居る。私は一日シオン山ヘダビデの墓參をした事がある。其時昔ベンテコステの祈禱會のあつた室で、ユダヤ人の暴利を貪ぼるのが癢にさはつて喧嘩したのである。彼等が利

を貪ぼると云うよりも寧ろ、全く強盜同然と云はねばならぬ。それ故に見物に行くにも一人では油断が出来ぬ。どんな事をするかも知れぬ故に同行者を待て行くのが安全である。斯る人民なれば神に捨られたのも無理ならぬ事と感じた。ユダヤ人就中エルサレムに住んで居るユダヤ人などが再び神に救はるゝや否や大疑問である。勿論神は何れの國民でも救ひ給ふ力があるが、ユダヤ人の神に救はるゝのは大難事であらう。彼等の中には「バプテスマ」の「ヨハネ」の如き義人が再び起つて悔改を促がすの必要がある。

(廿一) エルサレムに於ける説教

エルサレム滞在中一日米國領事博士メル氏の紹介を以て、英國新教派の宣教師タムソン氏を訪問した事がある。同氏を訪問した時には丁度集會があつて、氏の一室に祈禱の聲が聞えて居つた。玄關には二人のユダヤ人がこれも用事があつて、祈禱の終はるのを待つて居た。突然私が訪問したので二人のユダヤ人が餘程驚いたやうであつた。私の顔を見ながら互に耳語したが、勿論言語不通で何を語つたのか知れな

いが、それでも日本語で語つたかの如くに私に彼等の語つた意義が通じたのは不思議であるエルサレムに往つたからとて、直ちに方言を譯す異能を賜はつたと言ふ譯でもないが、彼等の語つた事柄が能く私に推量された、それは無論私のことを語つたので、是は何れの國の人であらうか、こんな人種を見たのは今日が始めてであるが、面白い容貌ではないか、トムソン氏を訪問に来た位であれば、クリスチアンに相違ない、珍しい人種もあつたものだ、何と云う人種だらうかと云うたのである、其中の一人が好奇心の制し難きが爲めか、妙な英語で君は「クリスチアン」かど問うたゆゑ、私は然りと答へた、彼等か私の「クリスチアン」なりと答ふるを聞いて、非常に喜んだやうに見えた、喜んだ筈である、其中の一人は新教の傳道者であつたからだ、喜んだのはそれのみではない、私の日本の「クリスチアン」なるを聞いたからだ、彼等が日本の名を近頃戦争でやうやく知つた位で、其東洋の極なる日本人を見たのみならず日本の「クリスチアン」を見たから非常に喜んだ、彼等の中の一人が私に云うた、先日エルサレムの市中であなを見た事があつたが、其時にあなたをば必ず「クリスチアン」に相違ないと思つた、中々善く當たものだ、彼も小預言者の一人であ

らう、斯く語り合ふて居る間に集會も終はり、トムソン氏に面會する事が出来た、氏は中々の熱心家で、年が若い、エルサレム傳道を以て自ら任ずる位の人であれば、珍しい程の篤信家である、同氏と共にエルサレム傳道に従事して居る英國人が男女共に四五人もある、氏の居宅も會堂も皆エルサレム城外の新市街である、前にも申上げた如く、エルサレムが石垣に圍まれて居れば、舊市街には發達の餘地がない、そのみならず城内は不潔で、人家も調密して居れば、外人の居宅や會堂を建築するやうな空地に乏しい、隨て今は石垣の外に新市街が出来るやうになつた、舊エルサレムはユダヤ風で、新エルサレムは西洋風である、この新市街は城の西北に位置して居るので、そんなにでも發達する餘地がある、トムソン氏は私の日本の「クリスチアン」殊に教役者なるを聞いて、氏の會堂で次の日曜の晩に説教しては呉れまいかと申出た、説教は私の本職なれば、辭退する筈もないが、日本語の説教とは違つて自ら進んで説教する程の元氣も出ない、少し困つたなれども、折角の願でもあり、特に天啓の書を我々に與へたエルサレムの人々に向ての説教なれば、恩返しとして、説教せざるを得ない、私は日本の「クリスチアン」を代表して恩返しの説教をしや

うと決心した、トムソン氏も私の承諾を大に喜び、私も亦珍らしい経験だと思つて喜んだのである。説教したのは日曜の晩であつたが聴衆は五十名ばかりもあつた、半分は外國人、半分はユダヤ人で私は英語で説教をなし、通譯者は青年のユダヤ人でアラビヤ語に譯して呉れた。通譯者を以て説教したのは生れて始めての経験だ。アラビヤ語を耳にしたのも始めてある、アラビヤ語は私に了解の出来る筈がないが、何んだか耳さばりの悪い語で、私の言語もあんな妙な言語に化したかと思つたれば可笑しい感じがした。私は珍らしくもない自分の經驗談を語つたが聴衆は非常に喜んで恰も使徒時代の集會を見るが如き思がした。使徒行傳の書き方へば聖靈人々の上に降りりとも云うべきである、全くそれは事實であつた。説教がすんでも聴衆が散じない、或は英語の祈禱となり或はアラビヤ語の感謝となり、何となく活氣が現はれて、散會する事が出来なくなつた。宣教師は私に向て、今一度勸をせよと云うた。私も勇んで左の如きすゝめをなした。このエルサレムはキリスト教の誕生地である、ペンテコステの集會もこのエルサレムに開かれ、聖靈の賜物の始めて興へられたのもこの地である。今は昔と變はつてエルサレムの市は斯く

も哀願を極めたなれども、諸君の信仰に由て再びエルサレムに「ペンテコステ」の日を見る事が出来るであらう。聖靈の用意は常に出来て居る、唯之を受くると受けざるは諸君の信不信に因るのみである。されば諸君は目を醒まして、火のバプテスマを受けん爲に祈らねばならぬと勸めた。拙い英語で云うたが巧なアラビヤ語に化したから、案外に聴衆を動かし、自分ながら驚く程に聴衆が感激した。その證據には今晚を始めとして七日間毎夜説教して呉れまいかと願はれた。感じない説教を七日續いて聞度いと思ふ人が一人もなからう、けれども明後日出發と云う時であつたから、残念ながら其願に應ずる事が出来なかつた。私がキリスト教の説教をするのは別に珍らしい事でもないが、極東の日本人の口からエルサレムで起つたキリスト教を聞くのはエルサレムの人に取つてはどんなに珍らしくからう、どんな説教を聞いたにしても珍らしい。況んや立派な説教に於てをやと云へば高慢らしく聞ゆるから、ひかへては居るが、私の説教は可なり善く出来た。勿論比較的善く出来たのである。四方八方から禮を云はれて心地善く別れを告げた。

(廿三) 日本の使命

日本の使命については我々キリスト教徒が大に近頃悟る所があるが、私がエルサレムに往つて、新に神より使命を受けたやうな気がした。それはどう云う事であつたかと云へば、前にも申上げた通り、私は英國宣教師のトムソン氏を訪問した事があつた。第一回目の訪問については既に申上げたが、第二回目の訪問について一寸御話する必要がある。或日突然同氏を訪問した事があつた。其訪問は双方共預期しなかつたので、或理由の爲に不意に氏を訪問することゝなつた。氏の門に入り、玄關に至つて刺を通じた所が、樓上で男女數名の宣教師等が歌うて居つた。何の歌であらうかと耳を傾けて聞て居つたが、どう云う事が私の耳には日本と云う語が聞えた。遠國に往つて獨り寂しく居る時には折々古郷の事を思起し、家族や朋友は勿論のこと日本と云う語すらも懐しく感ぜられる。其歌の中に日本と云う語のあるやうに聞えたゆゑに、胸が躍り上がるやうになつた。樓上に昇つて聞いた所が、いよゝ、それには違がなかつた。宣教師等が私の訪問を預知して歌つたのではない。彼等

が歌つて居た。其折に丁度私が訪問したので、云はば全くの奇遇であつた。其歌は全く日本の使命についての預言のやうなもので、未だ日露戦争の起らざる前に、否日清戦争すらも起らざりし前からあつたとの事だ。實に不思議ではあるまいか。そして或る米人の作であるとの事だ。是は歌ではあるが、全く日本の將來の使命に關する預言である。この歌を耳にして私は覺えず落涙したのである。それ故に宣教師に頼んで其歌の文句を書き寫して貰ふた。其譜までも書き寫してそれは私の手元にあるが、此には其歌を英文のまゝに記載することゝした。この歌を讀んで心を動かさずには居れない。私はこの歌を神より賜はつたものと信じて持ち返つたのである。

(1) Off the coast of Asia, mid the mighty ocean, lies an island kingdom

Strangely fair and bright, Ere the rising sunbeams touch the Asian high lands,

All her isles are glowing in the morning light, first to catch the radiance

Of a brighter Sunrise, Islands of the Morning, beautiful Japan.

CHORUS

Beautiful Japan, beautiful Japan, island of the Morning, beautiful Japan.

旅行談

Beautiful Japan, beautiful Japan, island of the Morning, beautiful Japan.

- (2) Like a Youthful giant, she is leaping onward, gathering up the spoils of
Every age and climes she has caught the vision of a grander future,
And would fain outstrip the very march of time, what she needs is Jesus
And his Holy Spirit, only Christ can save thee, beautiful Japan.
- (3) Land of wondrous beauty! what a charm there lingers over every lands-cape
Every flower and tree, But a brighter glory waits to burst upon thee
Than thy cloud-capped mountains, or thy inland sea, wake to meet the dawning
Of a Heavenly Sunrise, Rise to hail the glory shining down on thee.
- (4) At the gates of Asia, foremost of his nations, God has set his people,
In His wondrous plan, China's teeming myriads Korea's millions.
Wait for her to lead them to the Son of man, Rise to meet thy mission,
Haste to claim thy calling, Hail his coming kingdom, beautiful Japan.

エルサレム城内の御話は大概是まで述べたやうなもので私の見た處では別に他に御話をする程の處もない是から城外の古跡について御話をするのである。

(廿四) ギホンの谷

前にも述べて置いた通り、エルサレムの西南東の三方面は皆谷で圍まれて居る、これらの谷の景色も中々美しいが其谷に起つた歴史上の事蹟は中々興味のある事なれば、諸君と共に谷を「グルリ」と一周する積で、西の谷から御案内を致すことにする、今假りにエルサレムの西側にあるヨツバの門を出立するとすれば間もなく南へ下るので道路が廣い坂になつて居る、一町半も下れば右側に道路よりも低い池のあるのを見る、四角な池で随分廣いやうに見ゆる、昔は是よりも尙廣かつたと思はれる、何となれば新しき道路が出来た爲に其池を少しく埋めたやうに思はれるからである、池には水があれども濁つた泥水で、何の役にも立たぬやうである、昔はこの池も非常に清い水であつたが、市や人間の墮落と共に水までも濁つたのであらう、この池は見て美しい景色のあるものでもなければ、飲んで善い水でもない故に、別段注意して見る程の價值のないやうではあるが、私はこの池の邊を散歩する毎に、立留つて何を見るときもなしに目をとめて見た、この池の事は舊約聖書を御讀みになつた方の御承知の事であつて、これは有名なギホンの池と云はれたもので、この池の邊には色々の事柄が起つたゆゑ、その概略を御話致して置く、ダビデ王が祭

司ザドク預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤを召して云はるゝには、汝曹我子ソロモンをわが驛に乗せてギホンに下り、彼に膏をそゝいでイスラエルの王とせよと、そこで彼等王の命を奉じ、ソロモンを驛に乗せてギホンの池に下り、祭司ザドクがソロモンに膏を注ぎ、民萬歳を唱へ、王に従て笛を吹き、その喜び叫び聲の盛なるが爲に地裂けたとの事である。ソロモンの戴冠式とも稱すべき莊嚴の儀式は此池の邊で行はれたのであつた。斯る歴史的事蹟を心に浮べながらこの池を見れば、濁つた池でも清いやうな感がする。

またラブシヤケがアッスリヤ王の命を奉じ、大軍を率てエルサレムに上つた時にも、この池の邊に陣を取つた。この時には戦争をしたのではない。唯降参を勸告するに來たのであつた。ラブシヤケはアッスリヤ王の勢盛なるを説き、たとへエホバに頼むともアッスリヤ王の手より救はるゝことの出來ざるを示して、降参の利あるを説いた時に、ヒゼキヤ王これを聞き、其衣を裂き、麻布をまとひてエホバの家に入り、また預言者イザヤを召し、この危機一髮の際に如何にすべき乎を問ひしに、イザヤはエホバの旨を傳へ、決してアッスリヤ王を懼るゝに足らざる事を告げたとの

事は聖書に記されて居る。

ヒゼキヤ王が餘程財力に富んだものと見えて、このギホンの池に工事を施した事が聖書に記されて居る。即ち代下卅二〇卅にこの「ヒゼキヤまたギホンの水の上の源を塞ぎてこれを下より眞直にダビデの邑の西の方に引り、斯くヒゼキヤは其一切の工を善なし就たり」と記されてある。昔は水の質の善かつた爲めに、この處は布を晒す場處であつた。けれども今日では布を晒すに適せない。水の濁つて居る爲めか、一人も布を晒して居つた人を見た事がなかつた。今日では全く無用の池となつたので、或は時あつて全く埋立てらるゝかも知れない。この池より更に南に進めば谷が愈深くなり、隨て山はいよゝゝ高くなる。其邊から左を見ればシオン山が山城のやうに高く聳えて中々莊嚴な景色である。このギホンの谷は往來極めて瀕繁で、ステイションに行くにもこの道路を通るのである。即ちギホンの池から西に轉じ、更に南に上り、更に西に進めば、ステイションに達するのである。

(廿五) ヒノムの谷

ギホンの谷を「ステイション」の方へ曲がらずに南に進めば、シオン山の麓を巡つて谷は東の方角を取るやうになる。其方角の變じた處からは谷の名も變ずるので、其谷をヒノムの谷と云うて居る。この谷はギホンの谷よりも一層名高い谷で、この谷にはイスラエル人の歴史としては實に忌まはしき事蹟が起つた。それが爲にこの谷の別名を地獄と云うて居る。この谷で昔イスラエル人がモロクと云へる偶像を拜み、己が子女を焼て犠牲に供した事があつた。實に殘忍極つた行で、この谷で焼殺された小供等はつまり地獄に投られたもので、之を焼殺して偶像に献げた父母は地獄の鬼同様である。偶像に子女を献げた場處をトベテと云うて居る。昔この谷には城内の塵芥や、人の死体などを集めて火で焼いた事があつた。その火は間斷なく燃えて居たが、其焼かれぬ間に塵芥に蛆生する故に、キリストの「彼處に入るもの、蟲つきす火きえず」と云うたのは、このヒノムの谷より取つた比喻である。

谷の左に聳えて居るシオンと相對峙して右の方にも山がある。英語で之をヒルオブエブルカオンセルと申して居る。即ち悪しき謀略の山と云う。義で、昔この山のの上にカヤバの別荘があつた。祭司長や民の長老等がイエスを死刑に處せんとて相協

議したのはこの別荘であつたからだ。この谷の東端にアケルダマと云う處がある。是は諸君の御承知の場處で、血の圃はたけと呼ばれた處である。ユダがイエスを敵に賣つた其銀三十を投棄して自殺したゆゑに、其銀を以て陶工の地を買入れ、旅客の墓地としたのである。私もし死んだならば、アケルダマに葬らるゝのであたらう。其處より更に東に進めばヨブの井と云うのがあつた。是はヨブの掘つたのでもなく、飲んだのでもない。唯斯く名づけられて居るのみである。其邊はモリヤ山の南端即ちオベルの麓である。シロアムの池は其麓にある。この池はイエス生れながらの替者を遣はして其目を洗はせた處である。預言者イサヤが鋸の刑に處せられたのもこの池の附近である。

(廿六) ギドロンの谷

ヒノムの谷がエルサレムの南に沿うて東の方向を取り、遂にエルサレムの東に沿うて居るギドロンの谷と相會するやうになる。それ故に我々が其會合點から北に轉すればギドロンの谷を北に上ぼるやうになる。今諸君と共にギドロンの谷を南

から北に進むんで居ると假定して御話するのである。この谷をギドロンと稱して居るが、舊約聖書では普通にヨシヤバテの谷と云うて居る。この谷はユダヤ人から見れば非常に大切な谷で、今日ユダヤ人が世界の國々からパレスチナへ歸つて來る唯一の目的はこの谷に葬られ度いからである。この谷に葬りたい理由は何んであるかと云へば、世界の大審判がこの谷で行はるゝと信じて居るからだ。斯く信するやうになつたのも矢張元因がある。約耳三〇一二に「視よ我ユダとエルサレム」の俘囚人を歸さんその日その時万國の民を集め之を携へてヨシヤバテの谷にくだり彼處にて我民我ゆつりの産なるイスラエルの爲めに彼等をさばかん」とある。また同三〇十二に「國々の民よ起て上りヨシヤバテの谷に至れ彼處に我座をしめて四周の國々の民を悉く鞠かん」と記されて居る。ユダヤ人はこれを文辭通りに信じて居る故に大審判にこの谷で起ることゝ信じて居る。もし眞にその通りであるとすれば諸君もまた其時にはエルサレム見物の機會を得るであらう。

この谷を南から北に進むに従て、谷が淺くなる。左の方を見上ぐればモリア山の石垣高く聳え、右の方を見ればマオントオブオフィンスと稱する山が見ゆる。譯す

れば犯罪の山である。犯罪とはソロモンがこの山の上で偶像を拜んだことを指したのである。イスラエル人に取つては是程の重罪は他になからう。この山は孤立したものではなくして、低き處が境となつて橄欖山と連絡して居る。ヨシヤバテの谷は悉く墳墓を以て充されて居ればユダヤ人が他國から歸つてこの谷に葬られんとしても、最早や葬られる餘地がない程になつた。見る物としては墳墓のみで、其墳墓の中の重なるものは祭司ザカリヤの墳墓である。この人は餘程義しき人であつたと見えて、イスラエル人の不義を責めた事がある。聖書に左の如く記されて居る。

「神の靈祭司エホヤダの子ザカリヤに臨みければ彼民の前に高く起あかりて之に云ひけるは神かく宣ふ汝曹エホバの誠命を犯して災禍を招くは何ぞや汝曹エホバをすてたればエホバもまた汝曹をすてたまふと然るに人衆かれを害せんと謀り王の命によりて石をもてこれをエホバの家にて擊殺せり」

(代下廿四〇廿廿一)

彼は義の爲に不義の人に殺された。イエスがパリサイ人や學者等を責めた時にもこのザカリヤの事を引て云うた事があつた。即ち義なるアベルの血より殿と祭の

壇の間にて爾曹が殺し、バラキアの子ザカリアの血に至るまで地に流したる義人の血は凡て爾曹に報來らんが爲なり」と云うた(太廿三〇卅五)。

ザカリアの墳墓の北隣に使徒ヤコブの墳墓がある、この人は使徒の中では最初にエルサレムで殺されたもので、其殺された處が前にも申上げた如く、シオン山の上下で今のアルミニアン區と稱せられて居る處であるが其墳墓はヨシヤバテの谷にある、其墳墓のある處には洞穴があつて、口碑によればイエスの死より復活までの間、ヤコブがこの洞穴に匿れて斷食したとの事である。

その北隣には餘程目立て塔の形の墳墓がある、是はヤコブの墓やザカリアの墓などよりは餘程立派である、塔の大きさは方二十二呎で、高さは頂上まで四十七呎である、是はダビデの子アブサロムの墳墓である、この墳墓はアブサロムの生前に建たれたものであるとの説がある、母後十八〇十八に左の記事がある、「アブサロム我はわが名を傳ふべき子なしと云て其生る間に己れのために一の表柱を建たり王の谷にあり彼おのれの名を其表柱につけたり其表柱今日にいたるまでアブサロムの碑と稱する」とユダヤの小供等がこの碑を誣ふて石を投するとの事である、是れアブサロ

ムが父ダビデ王に謀叛した悪人であるから、アブサロムが折角己れの名を後代に傳へんとして建立した表柱が却て後代の人に誣はるゝやうになつたのは如何にも氣毒ではあるが、彼が不正の行爲の報であつて如何とも仕方がない、己が名を後代に傳へんとすれば、人々に記念さるゝやうな善事をなすのが最善の方法であつたのに己れの品格を毀ちて自ら其紀念碑を建たどて何の役にも立ぬ、アブサロムはユダヤにのみあるのではない、日本にも澤山ある、何れの國のアブサロムでも人々に誣はるゝやうになるのは免れ難い運命であらう、私はこの墳墓に石を投げはしなかつたが、其父ダビデに對する不孝の行を思起して深く憎む心が起つた、斯る不孝な子の死んだ時ですらも、ダビデが涙を流して「わが子アブサロムよわが子わが子アブサロムよあゝわれ汝に代りて死たらん者をアブサロムわが子よ我子よ」と云うた、親程慈悲深いものはない、其慈悲深い親に對して反旗を翻へしたのであるから、實に天地容れざる大悪人である、私にまでも斯く憎まれたのは彼がこの碑を建たからである、この碑を建なかつたならば私も彼を思起す機會がなかつたのかも知れぬ、悪人の仕事程愚なものはない。

アブサロムの墳墓の東北に當てヨシヤバテの墳墓がある彼はエダの王である、この谷をヨシヤバテの谷と稱するのは彼の墳墓のあるが爲めだ、其外にも澤山墳墓があるが、一々申上ぐる必要がない、只一つ加へて御話せねばならぬのはイエスの母マリヤの墳墓である、諸君がもしエルサレムに居つたとすれば、東側のステパノの門を出て坂を下り、ギトロンギトロンの谷を渡ると間もなく左の方を見れば、低い處に一寸會堂らしき建物のあるを見る、それは即ちマリヤの墓である、其中に入ればマリヤの兩親即ちヨアキムとアンナの墓もある、夫ヨセフの墓もある、この墓のある洞穴がイエスの祈禱を捧げたゲツセマチだと云う説であるが、確證がないから信するに足らぬ。

(廿七) ゲツセマチの園

ゲツセマチの園として今日に遺つて居るのは、このマリヤの墳墓の東南に當て二三十間程も離れた處にある園である、此處は橄欖山の西の麓で、谷を隔てエルサレムの石垣に對して居る、昔はどうであつたらうか、今日ではこの園は堅固な石垣で

圍まれて居る、その面積は長さ百六十呎、幅百五十呎であるが、昔はそれよりも廣かつたものであらうと思はれる、今でもそれは園として保存されて居る、昔は多分イエスの弟子の所有であつたらうが、今はフランシスカンの僧の所有で、矢張色々な花を培養して居る、この園に入るには東側に狭い入口がある、園の中を見ると、園が二重になつて居る、即ち外園と内園とがあつて、内外の園の間に幅一間半ばかりの通路があつて、園をぐるりと一周する事が出来る、内園があつても外園とは違つて、其中を見る事の出来るやうになつて居る、私は其周囲の道路を一周して見たが、外園の内側にはイエスの歴史を示した石齋細工が澤山飾られてある、其歴史は主の苦難に關した歴史のみで故意に、この園と釣合の取れるやうな歴史を擇んだもので、この園を訪ふ人にイエスの苦難を想起させやうとの目的から出た工夫であらうが、實に是れ程馬鹿げたものはあるまい、この園丈けで充分であるのに、人工的に除計なものを加へたのは、蛇足をそへたやうなもので、全くこの園の神聖を害して居る、この園を訪ふてイエスの死ぬるばかりの苦悶を想起さぬものがあらうか、然るに是等の石齋細工を見れば、餘りに其人工的なるに厭氣が起つて、憤懣な感情を

害するやうになる。是はこの園の缺點の一である。更に他の缺點とも云うべきは餘りに人工的に奇麗にして置く事である。即ち掃除や手入の行届き過ぎた爲に、これが昔のゲツセマ子とは思はれ難い。斯く手入れの行届くのは年中僧が掛り切りに掛て居る爲めで、塵一つたりとも見る事が出来ぬ程奇麗である。昔はこんなに奇麗ではなかつたらうが今は奇麗すぎて物足らぬ心地がする。今一つ缺點がある。是は止むを得ざる缺點ではあるが、昔のゲツセマ子を偲ばしむるには一方ならぬ妨害となつて居る。それは樹木に乏しい事である。我々の理想的に描いたゲツセマ子は、樹木の鬱蒼と生繁つた薄暗い園である。イエスの時には必ずそうであつたと信せらるゝが、今日は全くそれとは反対で樹木の少ない爲に、陽氣な庭園となつて居る。是が爲に私の想像したゲツセマ子を見る事が出来なかつた物は、見ずに想像して居つた方が遙かに優つて居る。イエスの當時はこんな状態ではなかつたに相違ない。昔からこんな陽氣な園であつたとすれば、イエスがこの園に來つた筈がない。園の中には「オリブ」の樹が七本、其外に杉木に似たやうな大木が五六本もある。これ丈の樹木では薄暗き園を作るには不足である。「オリブ」の樹は餘程の古木で、大なるは

周囲十九呎もあれば、餘程年數を経たものと思はれる。是がイエスの當時より遣つたものとするれば面白味もあらうが、そんなに古い木とは思はれ難い。二千年前のものと云ひ度いが、古くとも六七百年以上のものではあるまい。どうしてそんな鑑定をするかと云へば、それには相應の理由がある。ロマの大將タイタスが紀元七十年にエルサレム包圍攻撃をした事が歴史上の事實であつて、其時にはヨシヤパテの谷にある樹木を悉く斫り倒したのである。是は戦争の邪魔になつたからである。それ故にゲツセマ子の園の樹木も同時に斫り倒された。イエスが其蔭に跪て祈つた樹木も其時に斫られて了うた。其後千年も経て十字軍のエルサレムを占領した時には、この谷に樹木が一本もなかつたとの事である。然らば今日の樹木は十字軍以後のものと思ねばならぬ。ゲツセマ子に樹木があるとのことを記し始めたのは十六世紀以後の事であれば、是等の樹は十字軍時代よりも古い筈なく、十六世紀よりも新しいものではない。然らば十一世紀から十六世紀までの間に植られたものに相違ない。十六世紀には目に立つ程の大樹であつたからには、十二三世紀に植へられたものを見るのは適當であらう。さすれば六七百年のものを見る事が出来る。是

は私の鑑定だが誤つて居るまいと信じて居る、是等の樹木をイエスの時代のものと見て難有がる人にとつては御氣毒ではあるがそれでもイエスの時代のものを見たい人は勝手である、現にそれ程古いと信じて居る人さへある、それらの人々は歴史的證據を知らぬ人々なれば難有がるにまかせて置くより外は仕方がなからう、私とても是等の樹木を以てイエスの時代の樹木と無關係のものだと云うのではない、孫か玄孫位の關係があるかも知れぬゆる全く難有味のないものでもなからう、園の入口の前に大なる石があつて、是はイエスの祈つた時にペテロ、ヤコブヨハネの三人の弟子が疲れて眠つた石であるとの事である、其石から三四間も南に行けば、古い柱の斷片があつて、ユダが接吻を以てイエスを敵の手に渡した場處と云はれて居る、是には如何なる證據のあつての事か、實に怪しいものである、この園は昔はさうであつたか知れないが、今は橄欖山に上る道路とベタニヤに至る新道との曲り角であつて、少しも寂しい場處ではない、却て商店を開くに便利な位である、今ならばイエスの爲には祈禱を捧ぐる適當の場處ではあるまい、私は昔のゲツセマチを想像するに、今日のやうな高い堅固な石垣もなく、生垣位があつたと思はれ

る、そして園が東と南に廣がつて居つて樹木が生繁つて居たのであらう、ユダに案内された人々が炬と提灯とを携へて來たからには、イエスが或は樹間に匿れるだらうかとの心配があつたのかも知れぬ、またイエスが三人の弟子に向て、『起よ我儕往べし我を賣者近きたり』と云うたのはエルサレムのステパノの門を出で坂を下り來るのをイエスがゲツセマチの園から見た爲であらう、もし今日の如き園があつたとすれば、勿論見ゆる筈がない、それ故に昔は生垣の低いのがあつたものと思はれる、もしイエスに敵を避けんとするの意があつたならば、敵が坂を下つて居る間に南や東に遁るゝ、時間が充分にあつた、けれども彼は却て敵の方へ進んだので、其捕へられたのはゲツセマチの園内ではなくして、それを出た道路であつたらうと思はれる、イエスを捕縛せんとて來つた人々の『我は其なり』とのイエスの言を聞いて地に仆れたのも、其道路であらう、ペテロが劔を抜て祭司の僕の耳を斬つたのも同じ其道路であらう、イエスは其道路で捕縛され、ギドロンギドロンの橋を渡り、更に坂を上り、ステパノの門を通つてアンナスの家に曳かれて行つたのであらう、是等の事を思へば感慨無量で、其地を去るに忍びない、今は其道路の兩側に癩病人が並んで、旅人

に施を乞ふて居る、是れ丈けは昔も今も同じであらう。

(廿八)

ベタニヤ

ベタニヤは御承知の通り、マルタ、マリヤおよびラザロの一家族の住居した處で、イエスが宣教中屢次エルサレムに上り、其都度必ずベタニヤに宿り給うたゆゑに、一日其村を見んとてエルサレムから參つた事があつた。私はエルサレムの西北に方る橄欖館に宿つて居つた故、其處からベタニヤに往くにはエルサレムに入らず、市の北側の石垣に沿うて東に進み、ダマスコの門を右に見て市の東北隅に至り、其處から南に轉じ、ギドロンの谷を渡つてゲツセマチの園の前に出た前にも申上げた通り、園は東に往く道と南に往く道の曲角にある。東に往けば橄欖山に上り、南に往けばベタニヤに達するのである。けれども雨ながら實はベタニヤに往く道で、山を上ぼるのは古道、南に進むのは新道である。それ故にイエスおよび弟子等がベタニヤに通つた時はこの山道を取つたのである。新道は歩行に便利であるが、少し遠くなつて居る私がベタニヤに往くには新道を取つた。即ちゲツセマチの園の角か

ら南に轉じて進んだ。この道は古道よりは歩行に便ではあるが、矢張坂であつて、坂の上まで達するには三四町程もあつた。いそぐ必要もなければゆるくと四方の景色を眺めながら坂を上つた。左には橄欖山を望み、右にはギドロンの谷を隔てエルサレムの城壁を眺め、神殿の跡にある回々教の「モスクオプオーマル」と稱する堂宇が巍然として石垣の上に聳えて居た。坂を上ぼるに従て其堂宇の背後にある人家稠密のエルサレム市も眼界に入り、シオン山もヒノムの谷も、其他谷を隔てエルサレムを圍んで居る山々までも眼前に開展して、比類なき「パノラマ」を造つた。この日は幸に晴天であつて、太陽は東南からエルサレムを照らして居る。私は太陽を背に受けてエルサレムを後顧（か）いたところが、其石垣や堂宇が日光に照され人家の白く輝いて居るその色が紫色の天空と調和して美しい景色を造つて居た。けれども其景色は我國の景色のやうな優美を欠いて居る。どこやら凄味を帯びて居るのでエルサレム市其物は一つの古墳のやうに感せられた。それゆゑに私の感じも亦墓參でもしたやうであつた。坂を上りつめれば道は左に曲つて下り坂となる。左は橄欖山の裾で、古い谷に臨んである。山には此處彼處に「オリブ」の樹がある。耕やされ

て畑となつて居る處もあるが、小石の多い爲に善き畑にはなり兼ねて居る。山に沿うて三十分も歩んだと思ふ頃に、道路の左に石造の人家數十軒塊つて居つた。それらも人家とは思へぬ程粗末なもので、乞食小屋でもあらうかと思つた位であつた。それを通り過ぎんじしたが、乞食のやうな小兒が出て、英語で「ラザロストーンム」と云ひ掛けた。それはラザロの墓を見んとならば案内せんとの意であらう。斯く云はれたのでもしやベタニヤではあるまいかと氣が付いて、此處がベタニヤかと思ひ、見たらばベタニヤだとの事である。こんな處がベタニヤかと思ひ、其案内なるに失望せざるを得なかつた。ベタニヤは小村でもこんな不潔な乞食小屋の集つたものとは思はなんだ。こんな村にマルタやマリヤのやうな淑女が住んで居つたとはどうしても信せられない。實はマリヤのやうな立派な淑女でも居るだらうと罷々尋ね來つたのに、こんな乞食同然の人間ばかり居るのを見て失望せざるを得なかつた。能くもこんな荒果たものだ。イエスの時代にはこんなに零落した村であつたとは思はれない。ラザロの墓が此村にあるが私は其入口まで往つて見たのみで中に這入ることをしなかつた。中は眞暗で蠟燭を燈して入るのであれば、臆病者の

私にはそんな處を見物することが出来なかつた。信仰さへあればどんなに暗いからとて這入る事が出来たであらうが、私はその墓をラザロの墓と信する事が出来なかつた爲に、這入る勇氣も起らなかつたのである。墓は信じないがベタニヤをば眞のものと信じた。此村にはマルタとマリヤの家として昔から遺つて居るものがある。それは村の中でも一番高い處で、村中最大の家である。今は僅かに其零落の跡を見るのみであるが、其零落の跡を見てもすらも立派な家であつた事が知れる。そして餘程の古いものと思はれる。この家ならば或は眞であるかも知れない。墓のやうに容易に否定する事が出来ない。もしこの零落の跡がイエスの宿つた家であつたとすれば、林の中で最も富んだ家で、日本ならば村長の家とでも云うべきものである。家の位置も村中一等の場處で、其眺望は中々立派である。もしこの家であつたとすれば、尙更に面白い事がある。イエスがエリコからベタニヤに到着した時に、マルタが彼を村の外で迎へたとある。聖書に「イエス來給へりと聞て出迎へ」とある。どうして未だ村に入らぬ前にイエスの來つた事が知れたであらう。誰かマルタの家からイエスの弟子と共にベタニヤ指して來つたのを見たのであらう。家は高い地にあ

れば村の外までも見下す事が出来たのである。マルタがイエスの來れるを聞き、之を迎ふる爲めに村の外まで行つた。イエスが村の外でマルタに逢ふたと思はれる。餘程遠方に居つた時に既にイエスがマルタの家の人に見られたものと思はれる。マリヤも亦イエスを迎へんとて村の外に往つた。聖書に「イエス未だ村に入らず尙マルタの迎し所にをれり」とある。ペタニヤの地理を見て、福音書の物語に對して一層面白味を感じるやうになつた。

(廿九) 橄欖山

ペタニヤに往くには新道を通つたが、歸りには古道を通つた。ペタニヤは橄欖山の東の麓なれば其村よりエルサレムに歸るには山を越へて西の麓に下るのである。是れはイエス及び弟子等の常に通つた道路であつたから別に見るものがないとしても興味深きことなれば、私もこの道路を通つて見たのである。ペタニヤの背後から直ちに登り始むるので、道路は一面に石で恰も富士山にでも登るやうな氣がした。一步一步と高くなりまた峻しくなつて、道路も道路とは思はれ兼ねる程の悪

路である。昔から道路普請をした事があるまい。特に新道の開かれてより、こんな峻しい山道を罷々通る物好きの人もある筈なければ、往來は全く杜絶された。それが證據に途中で一人にも逢ふた覺えがない。こんな寂しい山路を越へたのも實はイエスの越へ給ふた道と思へばこそ喜んで試みたのである。歩行に慣れぬ身に取つては随分難儀ではあつたなれども、是はイエスやその弟子等の常に通つた同じ道だと思へば、苦しいながらも愉快であつた。一月の寒き頃ではあつたが汗をかきながらやうやくベツバケと云へる村に達することが出来た。この村は聖書に記されて居る處で、諸君の御承知の村である。イエスがエルサレムに凱旋するに先つて乗るべき驢馬の子を求めんとて其弟子を遣はしたのは、このベツバケであつた。この村はペタニヤから七八町も山を上つた處である。けれども橄欖山の絶頂ではない。絶頂はそれよりも北になつて、更に五六町も離れて居るやうに見える。ベツバケには別段是と云うて見るものなかつたが、ベツバケの眺望に至つては口にも筆にも述べつくされるものではない。世界にこんな景色が二つとあらうとは思はれない。自然の風光の雄大快濶に、歴史的連想が加はるゆゑに、眺むる人の心に感ずる

所は山の雄や雲の趣以外にある歴史的感興である。眼下に開展したる風光の大部分はヨルダンの谷である、この谷は北より南へ進むに従つて廣くなりまた深くなつて遂に死海に終つて居る、ヨルダンの河やエリコの平原などは手に取るやうに近く、深谷に眠つて居るやうな死海が日光に映じて明鏡の如く光つて居る、ヨルダンの谷の彼邊にある高原が紫色の屏風を立た如くに、北より南へ亘つて居る、北なるはギレアテの山、南なるはモアブの山である、死海の彼岸に聳ゆるモアブの山の其前面に死海を控へて居る状は、其懷に白玉を抱いて居るかの如き觀あつて、何とも云へぬ趣がある、ヨルダン河を見ては、バプテスマのヨハネや主イエスの事蹟を連想し、エリコの平原を見ては、ヨシアの勝利を連想し、死海を見ては、ソドムやゴモラの滅亡を連想し、その他ギレアテの山やモアブの山一つとしてイスラエル人の歴史に關係のないものがない、この自然と人事を以て織り成した雄大秀麗な「バラマ」を見て、魂天外に飛んだやうな氣がした、羽化登仙とはこんな事を指したのであらう、神異絶妙のこの風光をば未だ何人も描いた事のないのは何故であらう、未だ其寫眞器にさへ収めたのを見た事がない、思うにこの山に登る旅客の少なきが

爲であらう、私は斯る絶景を見たのは實は豫期したのではなかつた、唯イエスの御足の印せられたこの山道を踏んで見やうと云う一念から圖らずもこの絶景に接したのである、パウロが第三の天に上つた時に「或は肉体に在しか我知らず或は肉体の外に在しか我知らず」と云うたが、私の其時の感じもそれと同じで、肉体に在つたのか、肉体の外に在つたのか知れない位であつた、その時私がヨルダン河を眺めつゝ、

『主のゆきたまひし』

さかえのくにに

わがためそなはる

たのしきいこひ

ヨルダンのあなたに

かゝやく御園

かしこぞいこひの

わが家なる』

と云う讚美歌をうたうた、學校や會堂で歌うたのとは違つて、實際ヨルダン河を眺めながら歌うたのであれば、嬉しいのやら、哀しいのやら、何とも形容の出来ない感じがして、唯何となく泣き度くなつた、天國に上つて歌う時の感じも亦あんなものであらう。

私は橄欖山に登つた時に色々の事を連想したが、其中でもダビデの事を深く思起したのであつた。ダビデの子アブサロムが父に叛いてエルサレムを攻めんとせしにダビデが其身の危きを悟り、エルサレムを遁れ、ギドロンギドロンの川を渡り、橄欖山に降り、其首を裏み跳足で進んだ事があつた。山を降る時にはダビデが哭きながら歩つたので、やうやく山の頂上に達した時に折善くホシヤイと云う僕に迎へられた。僕は衣を裂き土を頭にかぶつて彼を迎へたとある。嶺を過ぎて降り始めた時に、メビホセテの僕デバと云うもの、鞍おける二頭の驢馬に、パンや、乾葡萄、乾棗、酒などを載せてダビデを迎へた。更に進んだ時にサウルの家のものでシメイと云へるもの出で、ダビデに石を投げ、之を詛ふて云うた。汝血を流す人よ、爾邪なる人よ、出され、爾が代りて位に登りしサウルの家の血を凡てエホバ爾に歸したまへり。エホバ國を爾の子アブサロムの手にわたしたまへり。視よ、爾は血を流す人なるによりて禍患の中にあるなり。母後十六〇七八とダビデの臣僕之を聞て大に憤り、彼を殺さんと欲したが、ダビデは詛ふまゝにまかせよと云うたので、彼は益詛ひの言を發し、ダビデに附きしたが、つて詛ひつゝ、石を投げ、塵を揚げて苦めた事があつた。是は

ダビデの一身に起つた事柄で、隨分うるさかつたらうと思はれたが、私もベタニヤから橄欖山に登つた時にうるさい事に遭つた。私がベタニヤを出立した時に二人の男が私の後に附き従つて來た。山道を案内するとの事であつたが、別に案内者の必要を感じなかつたために、還れと云うた。なれども中々還る様子がない。無用々々と云うても私の言には耳をも借さず、金を呉れと云ひながら従つて來た。案内者が先きに立つべきではあるが、私の後について來る。それでは案内者でも何んでもない。私は却て案内者のやうで、案内料を取るべきものは彼等ではなくして私であらう。二人共にうるさく附き従つて來たが、私も根氣よく忍んで金を出さずに居た爲め、その中年長者が途中から引返した。然るに其中の青年は、どうしも歸へる様子が見えない。餘りうるさいゆゑ、金で追ひはらはんとて、銀貨一個を呉れてやつた。それは半シリングの銀貨で、凡そ廿五錢に當つて居る。それを與へた處が、ピツクリして如何にも嬉しそうな笑顔を見せ、英語で「サンクユー」と云うて歸つた。廿五錢は彼の預想外の大金であつたらう。我々のやうな金のあるものらか云へば、廿五錢は何でもないが、ベタニヤの乞食同様の人から云へば、大金であつたに相違がな

い、笑顔を見せたのも道理である、ユダヤ人が容易に笑はないものと思つて居つたが、矢張之を笑はせる術がある、どんな陰気な人でも金を見せると必ず笑うものだ、廿五錢でユダヤ人の笑顔を見たと思へば、少しく高いやうではあるが全くの損でもなかつた、中々ユダヤ人の笑顔が容易に見らるゝものではない。

ベツバケを去つてエルサレムの方へ少しく進んだ處に道路の左右に別れる處があつた、左に往くのか右に曲がるのか容易に知れなかつたが幸に其角に年若き者が立つて居たので、エルサレムに往く道のいづれであるかを問うた、彼は左に曲がれと教へて呉れた、そこで私は其道を取つて進んで来たが後を願れば道を教へて呉れた青年が附いて来る、頼むもせぬに附いて来たのであれば、知らぬ振りして私も進んだが、彼も亦一言も云はずに進んで来た、彼も亦エルサレムに往くのであらうと思つて、道づれのやうに私が言をかけてやつたが、彼は英語を知らぬものと見えて答をしない、山を下つてゲツセマ子の園まで来た時に、今まで啞者のやうに黙して居つたものが、小聲で「バキシーシ」と云うた、この「バキシーシ」と云うのは、どんな意義の辭であらうか、能くは知らないが、旅客の耳に不快を感せしむるのはこの辭

である、どんな人でもパレステナに遊んだ人は、この「バキシーシ」に閉口して居るのである、何處に往つてもこの辭を聞かぬ事がない、斯る辭を聞くまいと思つには金を出すより外に法がない、乞食が旅客の面を見れば必ず「バキシーシ」と云う、到る處に乞食が居る、そしてこの辭を繰返して生活して居るのであれば、餘程彼等に取つては重寶な辭であらう、私は土人の辭で覺えたものはこの辭丈で、日本に歸つて「バキシーシ」と云うても一文にもならない、パレステナでなければ金にはならぬ辭である、諸君がもしパレステナに往かば必ずこの辭を云はれるに極まつて居るから「バキシーシ」に報ゆる金を多少用意するか、さもなければ自分の方から先きに「バキシーシ」を云ひ出すのである、是も御參考までに申上げて置く。

橄欖山は新約時代に至つて愈名高い山となつた、それはイエスの歴史と關係を結んだからである、私がこの山を西に降つた時に思起したのはイエスのエルサレム滅亡を預言した事である、イエスがエルサレムを出で、橄欖山に上り、中腹まで達した時に一時休息したものと思はれる、聖書に「イエス橄欖山にて殿に對ひ座し給しに、ペテロヤコブヨハネアンデレ竊に問けるは何の時この事あるや」と記されて居

る、この殿に對ひ坐しとあるを見れば、神殿の建つて居るモリア山と同じ高さ、またはそれ以上まで上つた時に休息して預言したものと思はれる。イエスが橄欖山の半分以上も登つて、モリア山に對つて休息したのであらう、橄欖山からモリア山まではその距離僅かであれば、神殿を眼前に見る事が出来る、私もイエスの休息した位置と思はるゝ邊から神殿の境内を眺めたが、其境内に幾人居つたかをも計算する事が出来た、イエスが「あゝエルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遣されし者を石にてうてる者よ母鶏の雛を翼の下に集る如く我なんぢらの赤子を集んとせしこと幾回ぞや」と嘆息されたのもこの山に登つた時であつた、是等の事を想起してこの山に登て見れば非常に興味を覺ゆるので、イエスの時代にでも立還つたやうな氣がする。

今日の橄欖山は昔とは餘程違つて居つて、昔になかつたものを今見るやうになつた、是は山の進化かも知れないが、昔のまゝの方が善いやうに思はれる、山の絶頂には細長き塔がある、是はヨルダンからですらも見えるところの事なれば、餘程高い塔である、之を「チョーチオブアツセンション」と稱して居る、譯せば昇天堂と云う義であ

る、イエスの昇天した場所に建立したとの事ではあるが、それは信するに足らぬ、イエスが橄欖山の絶頂から昇天したと云う事の證據がない、絶頂は天に近いからさう思ふたのであらうが、聖書の示す處によればベタニヤから昇天したやうに見ゆる、即ち「イエス彼等を導きベタニヤに至り手を舉て彼等を祝す祝する時かれらを離れ天に擧られたり」とある、使徒行傳には「イエスの昇天した後」に「彼等橄欖と名くる山よりエルサレムに歸る」とあるが、是は山の絶頂から下つたと云う意義ではなく、唯ベタニヤから歸つたと云う意味である、何となればベタニヤも亦橄欖山の一部であるからだ、それ故にこの昇天堂の建立された位地は眺望の至極善い處ではあるが、イエスの昇天した場處とは違つて居る。

橄欖山をエルサレムの方から眺むると最初に目につくものは其中腹にある露國の會堂である、屋根は金色燦爛として人目を驚かすばかりである、昔はモリアの山上に神殿が旭日に輝いてあつたが、今は谷を隔てたる反對の側に露國の會堂は夕陽に照らされて居る、その夕陽に照らされて居るのは不吉な兆候ではあるまいか、この邊の景色を飾つて居る點から云へば、餘程必要の建物のやうではあるが、これ

は野心の籠つた似て非なる會堂であらうと思へば、何となく憎らしく感ぜられる。是がもし純粹の宗教心から建てられたものとすれば、よし露國のものとしても私には尊敬を拂うのであるが、政治上の野心を裏んた宗教的の衣服だと思へば、憎らしく感ぜざるを得ない、露國は實に油斷のならぬ國である。

(三十) カルバリー

前にエルサレムのクリスチアン區の中に、チヨーチオフホーレーセブルカルがあることを御話致して置いた、そして世界のキリスト信者が昔から其地を以てイエスの十字架に釘られたカルバリーおよび其墳墓であると信じて、巡禮が其處を目的としてバレステナに来るとの事をも一言した、けれども其地は眞のカルバリーではなくして、其外に眞のカルバリーがある、どうして今まであんな處を眞のカルバリーと信じて居つたかと云へば、コンスタンテン帝の母ヘレナがエルサレムを訪ふた時に、夢に其地に十字架の匿されて居ることを知り、發掘して三本の十字架を發見した、三本の十字架とはイエスと二人の盜賊の十字架であつた、其三本の中の

いづれがイエスの十字架であつたかを檢定せんとて、當時エルサレムに在て不治病に冒されて居た婦人につけた處が、三本の中二本が毫も其効驗のなかつたのに、其中の一本が病人を愈すの力があつた、そこで其十字架をイエスの十字架と定めたのである、是は口碑なれば其地の果して眞のカルバリーであるとの學理的の考證とはならない、送信家を籠絡する事が出来ても、學者を満足せしむるには足らぬ、斯る薄弱な證據で何時までも信用さるゝ筈がない、今日まで千六百年間も信用されて来たが、最早やその信用を維持する事が出来なくなつた、其地にある會堂の爲には氣毒ではあるがキリスト教の古跡研究の爲には寧ろ賀すべき事である。

今此地を否定して更に他に眞のカルバリーを發見せんとするには、確實なる證據がなくしてはならぬ、聖書はカルバリーの位地について明言しては居ないなれども、間接にその何れの邊であつたかを示して居る、ヘブル書の記者が左の如く云うた『是故にイエスも己れの血をもて民を潔んが爲に門の外に苦を受しなり』(十三〇十二)と、また約翰傳には『許多のユダヤ人この罪標を讀りそはイエスを十字架に釘し所は京城に近ければなり』(十九〇廿)とある、さればカルバリーがエルサレムの城外

であつた事は疑ふべからざる事で、また何人もこの點に於て一致して居る、然るに今の會堂のある地はエルサレムの石垣の内、しかも城の中心に餘程近い處にある、この會堂を信する人の説によれば、今こそこの會堂の位置が城の中であるが、イエスの當時には城の外であつたとの事だ、エルサレムの石垣が昔から折々其位地を變じた故に、一概に斯る説を拒む事が出来ない、石垣にも第一、第二、第三の石垣があつたので、互にその位地を多少異にして居る、イエスの時代の石垣は第二の石垣であつた、それ故に其石垣の位地を知ることが出来たならば、この會堂がカルバリーでありや否やを極めることも出来る、ヨセファスの云う所によれば、第二の石垣が第一の石垣に屬するケナス門より始まり、城の北部を圍んでアントニヤ塔まで達して居る、この事だ、北部を圍んで云う事から考ふれば、この會堂の地は勿論石垣で圍まれた筈である、然るに此會堂を信する人々はこの石垣の方角を勝手に想像して、會堂の位地を石垣の外に出そうとして、其邊の石垣のみを引込ませて居る、是は極めて不自然の想像である、もし果して石垣が其邊のみ引込んで居つたとすれば、城の北部を圍んだと云うたヨセファスの言は了解し難くなる、博士エドワードロビ

ンソンはこの會堂の位地がイエスの時代の石垣の内であつた事の證據を擧げた、それは會堂の西に其石垣の土臺を發見した事である、この發見は反對論者に取つての最後の大打撃である。

メジヨールコンドルと云へる人がパレステナ探検の目的で多年間苦心した後、其研究の結果を千八百七十八年に世に公にした、其人の説によれば、眞のカルバリーはダマスコ門外の岩山で、回々教徒にはエルヘデエとして知られ、キリスト教徒にはエリシヤの土窟として知られた所であると、それには其證據とすべき事實がある、聖書にイエスの刑場をゴルゴタと稱して居る、それは髑髏と云う意義である、これについても説があつた、一説に刑場を髑髏と云うたのは髑髏が其邊に捨てられた爲めである、他の説には其山の形が髑髏に似て居る爲めであると、今日では後説が眞となつた、其山の断面は恰も人の顔の如くで、既に寫眞にまで取られて居るから疑を容れる餘地がない。

更に他の證據とも云うべき事がある、聖書に依ればイエスの刑場は人々の頻繁に往來する道路に接近して居た、即ち往來のものイエスを詣り首を搦て云々である、ゴ

ルゴタは即ち南から北に行く道路と、西から東に進む道路の相横ざる十字字の西北の角に當て居る、ユダヤ人はこの丘を處刑の丘と稱して居る、またこの丘は、詛はれたる場處として嫌はれ、ユダヤ人がこの丘の麓を通る折りに、唾を吐き石を投げ、て左の言を發するとの事である、『王たらんと欲して我國を亡ぼしたるものは、詛はるべきものなり』と、イエスがこの丘の上で十字架に釘られたとすれば、城の石垣からも、麓の道路からも、市中の屋根からも、また橄欖山やその北隣のスコパス山からも見えたので、聖書に依れば遠方から見えたとある、馬可十五〇四十には『遙かに望むたる婦ありし』とあり、路加廿三〇四十九には『遠く立て此等の事を見たり』とある、是等はいづれも證據となるものであらう。

この丘は昔から唯刑場と云はれたのみならず、石にて打ち殺す場處と云はれた、一説によれば預言者エリミヤが此丘で石にて打ち殺されたとある、この丘の下に大なる洞穴があつて、それは昔からエリミヤの洞穴として遺つたもので、彼が其中で哀歌を書いたと傳へられて居る、五世紀頃から傳つた説に依れば、ステパノの石にて打ち殺されたのも此丘である、千八百八十二年にこの丘の附近で會堂の土臺が

發見された、それにはステパノの名が記して居た、之に由て觀てもステパノの殺されたのはこの丘であつたと思はれる、そのみならず今日ダマスコ門と云はれて居るのは昔ステパノの門と稱はれて居つた、今はステパノの名は東門に附せられて居る。

カルパリーがこの丘であるとの事が學理的に證明されて居るからは、是非一度其丘に登つて見たいと思つて、一日其場處を訪ふたが、其地は今回々教徒の墓地となり、石垣を以て圍まれて居るため、入ることが出来ない、大抵の名勝舊跡が回々教徒の手に歸して居るのは實に残念である、私も十字軍を再び起したくなつた、石垣に圍まれては居つたが、一つの門があつたから、もしや開きはしまいかと思つて押して見たところ、不思議にも直ちに開いたのは實に嬉しかつた、天の使でも開いて呉れたのかと思つた、門の側に番人の居り、そうな小さな家があつた、番人でも出て來たらうかと思つたが、幸に出て來なかつた、圍のある地に無斷で入るのは善くないと思つたが、この地を見る爲に數萬マイルの旅をして來たのであれば、どうして遠慮しては居られやう、物を盜む爲に侵入したのでないゆゑに別に良心に責めら

るゝこともなかつた、もし人に咎められたならば其時には臨機應變の策を講ずるまでだ、見た後ならば何んと咎められても構ふ事がない、幸に言語不通と来て居れば黙して返答せずに居ればそれで済むのである、先方だとても啞者を相手に八ヶ間敷く云う筈もない、いよく怒つた時には怒り顔を笑顔に變らせる術も知つて居る、それゆゑすん／＼進んで丘上に登つて往つた、門から頂上までは一町餘りもあつたらう、この丘は上から見れば土で掩はれて居るが、矢張岩山であつて、南の斷面を見れば土は上皮のみで、悉く岩から出來て居る、丘の高さは麓の道路からは五六間位のものであるが、其廣さは二三千坪もあるやうに見えた、丘一面に墓であつて、其間に雜草がはえて居たが、樹木が一本も見當らなかつた、墓と云うても誠に粗末なもので、青山の墓地のやうに立派ではない、墓を見ても人民の貧乏な事が知れる、墓石も軟いためか裂けて居る、樹木のない墓地は陽氣のやうだが、そうではなくして却て物凄いなものだ、この丘上に立つた時にも色々の連想が群り起つた、ステパハの殺されたのもこの丘である、イエスの十字架に釘られたのもこの丘である、イエスの十字架に釘られた當時の事を想起し、三本の十字架が目の前に彷彿として

見えるやうであつた、十字架の下には母のマリアの涕にむせんで居る事や、其周圍に數多の敵の得意な顔して喜んで居る事や、槍を携へた羅馬兵のいかめしき風采や、イエスの手足から鮮血の滴つて居ることなどを思ひ出し、私の心は其悲劇の想像に充たされ、百感胸中に湧出で、去るに忍びなかつた、其時に私が

Must Jesus bear the cross alone,

And all the world go free?

No, there's a cross for every one,

And there's a cross for me.

と云う英語の歌をうたうた、イエスが我等人類を罪惡より救出さんとしてこの丘の上で十字架に釘られ給ふからには、其救の恩寵に沐浴した我等もまた其鴻恩に感激して、主の爲に十字架を負はねばならぬと感じた、イエスの殺された時には空一面に掻き曇つて暗夜の如くであつたが、私のこの丘上に立つた時には一點の雲もなき晴天であつたが、涙に目がくらんで晝ながら物を見る事が出來なかつた、私もヨハチと共に十字架の下に居るやうな氣がして、二千年の往事を眼前に見るやうに感じた、日本に居つた時にも幾度となくイエスの最後の悲劇を想像した事があつ

だが、實際カルバリーの丘上に立つて想像した時には、想像が實際か其區別たもなかつた、私がこの丘上に登るまでには一萬七千マイルも旅行して其間に幾多の艱難を嘗めたなれども、この丘上に立つた時の心の嬉しさが、途中の艱苦を悉く拭去つて了つた、カルバリーの丘に上つたこの経験は私に取つては千金にも換へられぬ程の貴いものである、多病な上に貧困な名もなきこの身を東洋の極からこの地まで導き給うた神の攝理はアブラハムをカルデヤよりこの地に導き給うたそれよりも尙不思議である、カルデヤは數百里の近きにあつたが、私をば東洋の極から西半球を迂回して此處まで導き給うたのである、何の用意もなくして古國を出たが、不思議の攝理に由てなくてはならぬ物を供給された知る人も知らぬ人も途中で色々と力を添へて呉れたがあの人々が神の使等であつたかも知れぬ、この光榮ある特權を我身に賜つたのは抑何の爲であらう、是も不思議の一つである、もし何かに報ひ給うたとすれば、それは即ちパレステナを見たいと云う熱心に報ひ給うたのであらう、その外には斯る大報酬を受くる程の理由を發見する事が出来ない、もしそうであつたとすれば志あれば道ありと云う眞理を實驗する事が出来た、神は

自ら助くるものを助け給うと信じて居る、私はこの目的さへ達すれば死んでも善いとの覺悟を以てこの旅行を企たが、死すに歸つたのも不思議の一つである。

この山から何か紀念になるものを持參せんとて、隅から隅まで廻つて見たが、墓の外には何もなかつた、何もないとあきらめて了うた時に、足下に唯一本の草花が咲いて居つた、花の色は純白で小さな花であるが、この寂しそくに咲て居た一本の草花を紀念にとて持ち歸つた、紅の血しほの流れたカルバリーの丘は白い花の咲いて居るのも面白き對照ではあるまいか、イエスの紅の血が人の心を洗ふて雪よりも白くするとの眞理の表號としてこの花が咲いて居たかのやうに感せられた。

イエス君のみうせたまひしカルバリーに
さびしく咲ける一本の花

とは當時の所感であつた、この小さなカルバリーの丘は、全世界を救ふに餘りある寶血の泉の湧出た處であると思へば不思議であるがそれは事實である、二千年後の今日この丘上に立て往事を回顧せば唯涙にむせぶばかりである。

卅一 イエスの墳墓

カルバリーが右の如くに證明された上は、之と共に其墳墓も何れの邊であるかを
知る事が出来るやうになつた。聖書に依ればイエスの墳墓はカルバリーの附近で
あつた。約翰十九〇四十一と四十二に記されたる言に「さて十字架に釘し其近傍に
園あり園の中に未だ人を葬りしことなき新き墓あり是日はユダヤ人の節蒞の備
日なり又墓近かりければ其處にイエスを置り」とある。イエスの墓がカルバリーの
近傍であるとの見込から、其邊を發掘して去る三十年間に二つの墓を發見した。一
つはコンドルの發見したもので、一つはゴルドンの發見したものである。コンドル
のものは千八百八十一年にカルバリーの西の方凡そ七百呎の地に發見され、ゴル
ドンのものはカルバリーの西の方二百三十呎の地に發見された。二つながら岩に
掘つた墓である。この二つの中何れがイエスの墓であつたかとの點についても人
々の考も多少違うては居るが、今日ではカルバリーに接近して居るゴルドンの堀
出したものか學者間にイエスの墓と信せらるゝやうになつた。之を發見した當時
には其中に澤山の人骨が積まれてあつた。無論それはイエスの骨ではない。是は其
後キリスト信者の墓として使用されたものと見えて、壁に二つの十字架が彫まれ

て居る。この墓の正面には建物のあつた跡もあつて、多分十字軍時代の建物であつ
たらうとの事ある。十字架の形から察しても十二世紀前のものではないと云はれ
て居る。イエスの墓であつたものを何故に後に至て他の人々の墓としたかと云う
疑問が起るかも知れないが、四世紀の頃には聖墓會堂の地がイエスの墓地と信じ
られたゆゑに此處をイエスの墓と知る人が一人もなかつたのである。百三十年に
アドリアン帝がエルサレムを再建するに際して、之を偶像教の市となしたからに
は、ユダヤ教やキリスト教の古跡をば罷となくじやうと企てた。それ故にこの墓も
イエスの葬られた墓として知られた筈がない。私はこの墓をイエスの墓と信じたゆ
ゑ、其中を見やうとして往つた。それは聖書にもある通り園の中にある墓で、昔の園
がどんなであつたか、今日では石垣で圍まれて居る。昔はアリタマヤのヨセフの所
有の園であつたが、今は英國人の所有となつて居る。この墓を發見したゴルドンが
英國人であつたゆゑ、英國人がこの土地を、爲に資金募集の目的を以て委
員を設け、其委員中にはエルサレムの英國領事、サリスベリー侯、カンタルベリーの
大監督などもあつた。愈之を買入れたのは千八百九十四年で、代價は二千磅即ち

二萬圓程であつたこの土地はカルバリーの西隣で低い地であれば、カルバリーの丘上より眼下に見おろす事が出来る、カルバリーが回々教徒の所有で、この園がキリスト信者の所有であれば、其間に嚴重に境界を立つるの必要が起り、政府から請求があつた爲に、今日石垣で圍むことゝなつた、カルバリーの丘上から園を見る事が出来るが、墓を見る事が出来ない爲に私は罷々それを見るに往つたのである、園の入口は西側にあればカルバリーより往けば迂回して住かねばならぬ、門が閉ぢられて居つたが、番人が居るゆゑ頼んで開けて貰ふた、私の參つた時には他に何人も見て居たものがなかつた、賈物の方へは諸國からの參詣人が澤山集つて居るが、眞の墓には殆んど來る人がない、盲人千人に目明が一人の割合なれば、賈物へ千人往く間にこゝには一人しか來ない、私は幸に其目明の一人であつた、私も他の事については盲人千人の部に加へらるべきものではあるが、この事については目明の中に加へられたのである、是も研究の御蔭と思はれる、今後エルサレムに往くところの日本人は何人でも皆目明の部に加へらるゝので、この點から云へば日本人は皆えらい人ばかりのやうに見ゆる、この園の中にも俗人の目を眩ますやうな立派

な會堂のない爲に、難有味に乏しやうだが私に取つては、この質素な園は實に興味に富んだものである、是は前にも申上げた通りアリマタヤのヨセフの所有地であつた、イエスの埋葬について聖書は左の如く記して居る。

『日くれてイエスの弟子なるヨセフと云へるアリマタヤの富人きたりてピラトに往きイエスの屍を請しかばピラトその屍を付せと命ずヨセフ屍を取て潔き泉布につゝみ之を磐にほりたる己が新しき墓におきて大なる石を墓の門に轉して去る』(太廿七〇五十七一六十)

エルサレムの附近に斯る園を所有する位であればヨセフの富める人であつた事も知れる、彼が己が家族を葬むる爲に園の中に墓を造つたが、其時には未だ何人も葬むつた事のない新しい墓であつた、ユダヤ人が家族皆同じ場處に葬らるゝとか又は先祖と同じ場處に葬むらるゝことを願ひ、一人離れて葬むらるゝのを嫌ふたやうに見ゆる、ユダヤ人の先祖ヤコブがエジプトに移住したが、年老ひて死んでするに臨んで己が葬りの事について命じた事がある、即ち

『我はわが民に加らんとすへテ人エフロン^{ヘブロン}の田にある洞穴にわが先祖等と共に

我を葬むれその洞穴はカナンの地にてマムレのまへなるマクペラの田にあり
是はアブラハムがヘテ人エフロンより田と共に購て所有の墓所となせし者なり
』創四十九〇廿九、卅

と云うたヨセフも己れの所有の園に家族と共に葬むらるゝ積であつたが己が墓
にイエスを葬つたのは、イエスに墓を献じたのである。

この墓を見るには番人に頼まねばならぬ、番人が鑰を以て墓の戸を開いて呉れる
何の爲にこの墓に錠をかけて居るのか合點がゆかない、園の中でも墓のある處が
一段低くなつて居る、以前は園全体も低かつたので段々墓が見えなくなる程に埋
つたものと思はれる、墓の入口まで五尺ばかりも段を下つて往かねばならぬ、墓の
入口は古くよりあつたものと違つて、別に其傍に新に開けたものである、墓は堅い
岩に堀つた横穴で、高さ七呎六、インチ、奥行十四呎六、インチ、幅十一呎二、インチであ
る、其穴の中には横に仕切があつて、三人位を横に奥から順々に葬むるやうに出來
て居る、墓の傍に四疊半ばかりの廣さの室がある、今の入口が其室に入るやうに出
來て居るから、墓を左の側から見るやうになつて居る、この墓を見るには別に見料

が入らないが、錠を開けて呉れるために多少の心付をせねばならぬ。

墓を見てから園をも残らず廻はつて見たが、石の多い處で餘り地味の善いやうに
も思はれないけれども色々の野菜や草花などを培養して居る、園の中に一寸見た
處が直徑三尺ばかりの小さな古井がある、石で堅固に疊んで居る、中が眞闇らで、ど
れ程深いものか一向知れない、是は多分ヨセフ時代の古井で珍らしいと思つたか
ら、その深さを知らうとして、番人に知れないやうにそつと小石を投げて見た、悪い
事とは思つたが是も研究の爲めで、二度と投げるのではないから思ひ切つて投げ
て見た、墓を訪ふ人々が皆一つ、投げるならば、どんな深い井でも忽ち埋つて了う
ゆゑ、投げないやうに注意せねばならぬ、餘り勝手な事を云うやうではあるが、石で
うめるのは惜いものだ、私は諸君を代表して投げたのであれば、今後投げる必要が
あるまい、石を井に投げればどんな音がするかを大抵知つて居るが、私は其音を聞
いて驚いた、「ポチャン」と云う音でもするかと思つたら、そうではなくして、餘程時を
経てから「ゴーン」と鐘でも打つたやうな音がした、其音は石の水を打つた反響であ
つて、見掛に寄らぬ程の深い井であることを知つた、この邊は海から二千五百呎も

高いからには、深く堀らねば水が湧かない、この井のある爲に園が出来て居るので、井はこの園の生命である、時節は冬であつたから珍らしい草花もなかつたが赤い唐辛が畑にあつたから、そつと二つ取つて来た、法律的の眼孔で見たらば竊盜犯かも知れないが、幼児が酸醬でも盗んだものと同一視すれば、悪事でもないらしい、盗んでから番人の小屋に往つて色々の話をなし、其處から水仙の玉や其他のものを買つて来たが水仙が印度洋の暑氣の爲に枯れたらしい、他のものは幸に芽を出すやうになつた。

この園には昔から番人又は園丁があつたもので、マグダラのマリヤがイエスの墓を訪はんとて朝早く来た時に、イエスを見ながらも彼とは知らず、園を守る人ならんと思つて、『君よなんぢもし彼を轉移し、ならば何處に置しか我に告よ』と云うた、即ちイエスを番人と見誤つたのである、私の見た番人はイエスと見誤らるゝやうな年若き人ではなくして六十近い老人であつたけれども、イエスと見誤れたものゝ子孫かも知れない、彼が錠を開けて呉れたのは善かつたが、説明して呉れたのは閉口せざるを得なかつた私を何人と見たのかは知れないが、普通の巡禮の一

人とても見たのであらう、實に馬鹿々々しいやうな説明をして呉れた彼がイエスと見誤られた昔の番人でもあつたかのやうに、イエスの當時の事を見た如くに説明して呉れた、即ちイエスの死体の置れた處がこの場處で、天の使が坐つたのは彼處だなど、指差して教へて呉れた、そんな説明を聞いて感服して居るやうな人間ではない、彼は親切に説明して呉れたが、この説明を聞いて私は番人に馬鹿にされたやうな氣がした、こんな番人なら廢した方がました、この番人の説明を聞けばユダヤ人の案内者の頼むに足らぬ事が知れる、それ故に前にも願つて置いた通り、パレスティナに往かんとする人ならば、私は最も安全なまた確實な案内者を諸君に推薦するのである。

(卅二) ベツレヘムの途中

エルサレム滞在中一日ベツレヘムに遊んだ事がある、この邑はエルサレムの南方凡そ五「マイル」の地にある、ヨツパの門を出てギホンの谷を下り、ギホンの池の邊で西に轉じ更に坂を上り、南に一直線に進めばベツレヘムに達する、私の往つた時は

道路普請中であつた爲に馬車が揺れ、歩行した方が餘程便利であつた途中では一臺の馬車も見ない、何人でも皆歩行して居たのに私のみ馬車に乗つたのは贅澤のやうに見えたが別段紳士を氣取つた爲めではない、始めての土地なれば道も不案内ではあるしそれに歩いて行く程の元氣もない、元氣があつたとしても案内者を雇はねばならぬ、時間も入れれば金も入る、どの點から考へても歩行するのは不經濟であるから、馬車を雇ふのは高いやうでも却て安いのである、途中には村らしきものもなく、高い山もなければ川もない、唯石の多い原野のみである、この原野は平坦ではあるが、高原であつて極めて樹木には乏しい所である、途中で葡萄樹を見たが、勿論冬であれば葉もなく花もなく、唯幹と枝ばかりであつた、始は何んであらうと思ふたが能く見たところがそれは葡萄樹であつた、樹と云へば上に生長して居るやうに思はるゝが、そうではなくして地面に匍ふて居る様は宛ながら蛇のやうだ、途中の景色と云へば如何にも雜風景で、目を娛ましむる程のものが殆んどないが、皆古戦場であるから、中々興味がある、三「マイル」も進んだかと思ふ頃に馬車が突然止まつた、其所には珍らしくも人家があつて、一つの古跡だと云う事である、地名

をカタモンと云うて、シメオンと云う人の住んだ所である、シメオンとは主イエスをエルサレムの神殿で抱いた人である、彼がメシアを見て非常に喜び、主よ今その言に従ひて僕を安然に世をば遊せ給ふ」と神を讚美したことがあつた、其處にまた井があつて、博士の井と稱へられて居る、傳傳に依れば東方の博士が星に導かれてエルサレムに來り、更にエルサレムを去つてベツレヘムに向うた時に、此地まで來つて再び星を見たとの事である、こんな事は俗人には面白いかも知れないが、實に馬鹿々々しい話である、其處を去つてベツレヘム近く進めば、路傍に唯一つの石造の建物が寂しそくに立つて居た、其形は四角で中央には圓天井がある、其處にも馬車が止まつた、是は博士の井のやうな怪しものではなくして、信を置くべき地であれば念を入れて見る程の價值がある、昔イスラエル人の先祖ヤコブがバダンより出で、ヘブロンに往く途中この地まで來つて、妻ラケル時満ちてベニヤミンを産んだ然るに不幸にも難産であつた爲に、子が助かつたなれども母のラケルは遂に歸らぬ人となつた、聖書にその時を記して「ラケル死てエフラタの途に葬らる、是即ちベツレヘムなりヤコブその墓に柱を立てり、是はラケルの墓の柱と云ひて今ま

であり「創卅五〇十九廿」と云うて居る、この石造の建物は即ちラケルの墓である、けれども今ある建物はヤコブの建たものではなくして後代のものである、ヤコブの建たのは柱であつたが、それは今はなくつて、立派な建物がその代りに出来て居る、其墓の前に立つて當時の事を思へば、四千年近くの前出来事でも、近年の出来事のやうに思はれた、周囲は满目荒涼として物寂しい原野だが、其附近には珍らしくも樹木がある、けれども樹のあるのは却て一層寂しさを増すのみで、幽霊に於ける柳のやうなものだ、この寂しい處に數千年の間ラケルが眠つて居る、彼の死を嘆したヤコブも其時に生れたベニヤミンも既に世を去つて數千年を経過して居る、墓前にて昔を偲んだ私も、私の所感を聞いて居る諸君もやがて墳墓の主人となるのである、墓前に立しばし留つた丈で、直ちにベツレヘムへと出立した、「マイル」も進まぬ間にベツレヘムに達し、馬車一臺やうく通れる位の狭い道路を経て、廣小路に出た、其所で馬車より降り、其前面にある「チョーチオブテグイテ」即ちイエスの降誕地に建立された會堂を見物した。

卅三

ベツレヘム

ベツレヘムはユダヤの邑の中では昔も今も大なるものとは云はれないが、これ程名高い邑は世界にも多くはあるまい、この邑を斯くまで名高くした元因には色々あるが、其重なる元因はイエスの降誕である、米五〇二に

「ベツレヘムエフラタ汝はユダの郡中にて小き者なり然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我ために出べし」

この預言があつて、それが適中して主イエスがベツレヘムに生れ給うたのである、私がベツレヘムに參つたのも其歴史のあるが爲めで、邑其物は毫も見るに足らぬ程の小さき邑で、エルサレム程に不潔ではないが、五十歩百歩で、別段景色の見るべきものもないけれども、ベツレヘムの歴史を連想すれば、ロンドンやパリなどよりも遙かに興味が深い、ベツレヘムのベツレヘムたる所以は其歴史にある。

この邑の起原については確かに知ることが出来ないけれども、非常に古い邑であるとの事丈けが明かである、ヤコブがこの邊を旅行した時には既にエフラタと云

う名でこの邑が存在して居つた、或は四千年餘も古い邑かも知れない、ベツレヘムと云う名は何れの時代に始つたものか、ヤコブよりも餘程後の事であらう、ベツレヘムとは「パン」の家と云う義で、今はベツレヘムとは云はず、ペートラムと云うて居る、それは肉の家と云う義で、「パン」が肉と變つたのである。

ヘブル人がカナンカナンの地を占領した後に、ベツレヘムにはレビレビの人が住んで居た事が聖書に示されて居る、未だイスラエルに王と云うべきものなく、人々勝手氣儘の行をして居つた時に、ミカと云へる人偶像を拜み、其偶像教の祭司を得んと欲して、遂にベツレヘムに居るレビ人を祭司とした事があつた、またモーセの孫に當るヨナタンもベツレヘムに住み、ダンの支派の祭司となつた事がある。

ベツレヘムについて聖書に記されて居る事の中で、殆んど小説のやうな美談が諸君の御承知のルツの事である、ルツの時から三千餘年も過ぎたなれども、ベツレヘムの周囲の景色は今も昔のまゝで、其地に往つてルツの事を思ひ起せば、彼の時代に立還つたやうな心地がする、ベツレヘムの人にエリメレクと云う人があつた、飢饉の爲にベツレヘムに住みかねて、其妻ナオミと二人の男子を携へ、古郷を去つて

モアブの地に寄寓した、ベツレヘムの附近は一面に山地で、ベツレヘムもまた山の上にある、其東には平地があつて、穀物の畑や牧場となつて居るが、一般に水に乏しい爲に、雨の降らぬ時には、忽ち飢饉となる、エルメレクの時の飢饉もそれが爲であつた、當時の飢饉が餘程激しかつたと見えて、彼が一家族を携へてモアブの地に難を避けた程であつた、其遁れたモアブの地はベツレヘムの東で、死海を隔てたる山地である、ベツレヘムから東を眺むると、紫色の山が美しき景色を作つて居る、其までの距離が三十餘マイルで、それは即ちモアブの山である、斯く遠からぬ地なれば、遁るゝにも便利であつた、二人の男子がモアブの地に生長して、其地の女を娶つて妻としたが不幸にして、エリメレクも死し、其二人の男子までも死んで、後に残つたものは三人の嫠婦のみであつた、母ナオミがベツレヘムに歸らんとて、二人の媳を其古郷のモアブの地に殘し、已れ一人ベツレヘムに歸らんとしたが、二人の媳も母と共にベツレヘムに往かんことを願ひ、母の説諭のあるにも拘はらず、モアブに留まらじと決心し、母の後を追ふて途中まで出で来りしが、ナオミが彼等の行末を案じ、已れに従ひ來るとも何の望もなければ、寧ろ古郷に留まる方益なるべしと懇々

説諭を加へた爲に、二人共に聲を擧げて哭き、其中のオルバと云へるもの母の説諭に従つてモアブへ歸つたが獨りルツのみがその決心堅く「我は汝のゆくところに往き汝の宿るところに宿らん汝の民は我民汝の神はわが神なり汝の死るところに我は死て其處に葬らるべし」と云うて、鐵石の如き堅き決心を示した爲に、ナオミも深く其志に感じ、彼を携へてベツレヘムに歸へることゝなつた。ルツの如きは眞に東洋的の婦人で、モアブの婦人ではあるが、恰も日本の武士の妻を見るが如き心地がする。西洋の婦人がこのルツの物語を讀んでどんな感じを懐くであらう、必ずルツを以て當世向きの婦人ではあるまいとか、二十世紀の婦人にはそんな眞似が出来ぬものかと思ふに、一笑に附し去るかも知れぬ。ナオミとルツの二人がベツレヘムに歸つて歓迎されたなれども、財産とては一つもない貧困の身であれば餘程生活の道に苦んだやうに見えた。そこでルツが母を養はんが爲に麥の穂を拾はんとてポアズと云へる人の田に行つた。ポアズはエリメルクの親戚でまた富める人であつた。其田までも何れの邊であつたかを知る事が出来る、それはベツレヘムの東にある平地で三千餘年の昔ルツが穂を拾ふて居るのは今でも彷彿として見えるやう

である。ポアズがルツの身の上を聞き、深く其貞節に感じ、其僕に命じて罷とルツに拾はせんとて穂を落させ、また食事の時にはルツを呼んで、燒麥トウモロコシを食らはせ、ルツが食ふて残れる分を己が其懐に入れたのは何の爲なるかを御推察が出来るのであらう。日の暮まで拾ふた爲に、一日に大麥一斗許も拾うた。斯る事が縁となつてルツがポアズの妻となり、オベテと云へる人を生んだ。オベテは即ちダビデ王の祖父である。

ポアズがベツレヘムでは名高い人であつたが、オベテについては聖書に別段記されては居ない。其子エサイについては屢記されて居る。ダビデもエサイの子として知られた位であれば、餘程名の知れた人と思はれる。ダビデのみならず、イエスすらもエサイの株かぶ又はエサイの根と云はれた。エサイが名高い人であつたが、其子は親よりも更に名高くなつて、ベツレヘムの名がダビデに由て世に知られるやうになつた。即ちベツレヘムがダビデの邑と云はれた。この大人傑のダビデの事について少しく御話するの必要がある。

サウルがイスラエルの最初の王であつたが、この人は神の聖意に合はざる人であつ

た爲に、神彼に代はるべき王を選まんとて預言者サムエルをベツレヘムに遣はした。サムエルがベツレヘムに至り、エサイの子等を招ぎ、其中より季子のダビデを選抜した。このダビデがベツレヘムの人として有名なばかりではない、イスラエル人の王として、軍人又は詩人として、更にイエスの先祖として有名な人である。イエスもダビデの子と稱せられ、ダビデはメシアの前表としてイスラエルの王位に即いた人であつた。私がベツレヘムに往つて色々の事を思起したが、この地がダビデの如き大人物を産んだ事や、彼が幼年の時にこの地の山野を跋渉した事などを思ひ起して、昔を偲んだのである。今もこの邑が一小村に過ぎぬれども、ダビデを出し更に彼よりも大なるメシアを出した事は、この邑の特有の光榮である。

ダビデは大過失のあつた人だが、是は人間の弱點であれば、過失を過失として恕し彼の偉大なる點を見れば、イスラエルの歴史に彼の如き大人物がなからうと思はれる。否、世界の歴史に於ても彼に優るものが多くはあるまい。ダビデは理想的の大人物である。斯る大人物をこんな片田舎のベツレヘムが産んだと云うのも實に不思議ではあるまいか。英雄の多くは田舎より出づるのは普通の事である。容貌から云

へばダビデは顔の赤味を帯びた目の非常に美しい人であつた。今日のパレスチナの人々が一般に眼が悪い、随て容貌も醜惡である。然るにダビデの目が立派で、其容貌までも美麗であつたから、餘程の美少年かと思はれる。幼年の時に彼はベツレヘムの野で羊を牧うて居つた。其野がイエスの時代にも矢張牧場であつて、メシアの降誕の嘉音を傳へられた牧者の居つたのも同じ野であつた。それもベツレヘムの東に今も尙残つて居る。この美しい少年のダビデが見掛に寄らぬ剛膽の人で、其美しさに於て比類なきやうに、其勇氣に於ても亦比類なき人であつた。彼はベツレヘムの東で羊を牧ふて居つたが、或日獅子と熊とが來つて、羔を奪ひ去つた。ダビデ之を追ひかけて、其口から羔を取返へさんとしたが、獅子と熊とが怒つてダビデに飛かゝつたゆゑに、彼は兩ながら之を殺して了うた。彼は其後小石を以て、ベリシテ人の大將ゴリアデを打ち倒した。斯る勇猛なる人にも似ず極めて優美な人であつた。彼は深く音楽を好み、サウルが悪鬼に惱まされた折りには、琴を取り自ら弾じた爲に悪鬼サウルを去つたとある。是はダビデの音楽に堪能であつた事の證據である。聖書に「我ベツレヘムの人エサイの子を見しが、琴に巧にしてまた氣して善く

戦ふ辯舌さはやかなる美しき人なり』母前十六〇十八と記されてある。彼が音楽者であつたが、また文學者であつた。彼が其實験を詩に作つたのは多く詩篇の中に残つて居る。かの有名なる『エホバはわが牧者なりわれ乏しきことあらじ』云々の詩は、彼がベツレヘムの牧場で羊を牧うた實驗をエホバに適用して歌うたのである。また『もろくの天は神の榮光をあらはし穹蒼はその手のわざをしめす』と歌うたのは、ベツレヘムの郊外で眺めた夜景を歌うたのである。

ベツレヘムの入口にはダビデの井と稱せらるる井がある。是はダビデの掘つたのではないが、彼と關係のあつた爲に斯くは名づけられたのであらう。三千年も昔の井が今に尙残つて居るとは不思議のやうではあるが、残るべき理由がある。パレスチナには水の乏しい爲に善き水の湧く井ならば何人も大切に之を保存するの習慣がある。それが爲に三千年後の今日までも残つたので、今後とても永く残るであらう。この井に關する事蹟は御承知でもあらうが、一寸御話申して置く。ダビデがサウルに憎れてベツレヘム附近の洞穴に匿れた事があつた。その洞穴をアドラムと云うて居る。當時ダビデがサウルに憎まれて居たのみならず、ベツレヘムの邑もベリ

シテ人に占領されて居つたゆゑ、ダビデがベツレヘムには歸られず、水に乏しい、山間に潜伏して渴き苦んで居た。彼はベツレヘムの入口には善い井のあるを思ひ出した。が、その水を汲み取ることも出来ず、唯只管に慕ふのみであつた。聖書にダビデの當時の事を左の如く記して居る。即ち『ダビデ慕ひていひけるは誰がベツレヘムの門にある井の水を我にのましめんかと』母後廿三〇十五。ダビデの心を察して三人の勇士が密にベリシテ人の陣を通り抜けて、邑の門にある井の水を汲みとり、それをダビデの許に携へ歸つた。實に忠義なる人々である。然るにダビデがその水を飲みたい事が山々ではあるが、生命を瘡して勇士が汲んで來た水をば飲むに忍びぬと云うて飲まなかつた。斯る事柄の起つた爲にその井がダビデの名を以て世に知られたのである。

ベツレヘムの歴史中で最大の事件はイエスの降誕である。ロマ皇帝カイザルオウガストの勅命により戸籍調査が始まつた故に、ガリラヤのナザレに居つたヨセフとマリヤとが、ダビデの子孫であつた爲に先祖の邑に歸て調べらるゝこととなつた。ナザレからベツレヘムまでは八十マイルもある。當時處をよりベツレヘムに歸

り來つた人の多かつた爲めに、旅館が忽ちふさがり、ヨセフとマリヤとが止むを得ず洞穴に宿ることゝなつたこの洞穴は厩であつたこの事である。聖書によればイエスが其洞穴に生れた夜、天の使がベツレヘムの附近の野にある牧者に現はれ、イエスの降誕の音信を傳へたこの事である。其牧者の居つた野がミグダルエダルと云う處である。其後東方の博士もベツレヘムに來つてイエスを拜した事がある。是等の博士が何れの國より來たものか、唯東方よりとあれば學者の間に色々の説があつて一致しない。或はバビロンより來たと云ひ或は一人は印度より、一人はエジプトより、一人はギリシヤ人より來たとの説もある。そして其印度よりの人はメルケオル、エジプトよりの人はカスバル、ギリシヤよりの人はバルタサルと云う名の人だと云はれて居る。彼等が星に導かれて來たとあるが、この星をば星學上の星と見るの必要がない。昔バビロンなどでは大人物の生るゝ時には特別の星が現はるゝものと信じて居た。ユダヤ人の中にもメシアの出現の時には星の現はるゝことを信じて居た。ラビの云う所によればメシアの現はるゝ時には星が東方に見えて非常の光を發し、七つの星が四方より集つて之と戦うとある。メシアと星との關係

は聖書の左の言から起つたのであらう。「我これを見んされど今にあらす我これを望まんされど近くはあらす」ヤコブより一個の星いでん〔民廿四〇十七〕と、イエスの世を去てより百三十年の後、偽りのキリストが出で、自らを稱して星の子と云うた。是も星とキリストとの關係あるを示して居る。天文學者の計算によれば、イエスの降誕の時に土星と木星とが一處に合した事があれば、或はそれかも知れぬと云う人があれども、是は取るに足らぬ説である。星が實際現はれたものであらうか、それすらも疑問なのである。

博士の訪問後間もなく悲惨な事柄の起つたのは諸君の御承知のことである。私がベツレヘムに往てヘロデ大王の虐殺事件を思起したのである。ヘロデ大王がユダヤ人の王たるべきメシアが生れたと聞き、己が王位の危険を感じ、そのメシアの未だ成長せぬ前に殺さんとの目的を以てベツレヘム及び其附近にある二歳以下の嬰兒を盡く殺したのである。實に殘忍酷薄言語に絶した暴行である。馬太もこの事件を記載した時に、豫言者エリミヤの言を適用して「歎き悲み甚く憂る聲ラマに聞ゆ、ラケルその兒子を歎きその兒子のなきによりて慰を得ず」と云うた。この豫言者

は元來イスラエルの人々のバビロンに捕虜となつた事を指したのであつたが、馬太は再びヘロデの虐殺事件に應用したのである、己が兒子の殺されたるを歎いたラケルとは即ち前に申上げたエフラタの途に葬むられたラケルの事である、タルマツド書に依ればイスラエルの人々のチブカドチザルの兵卒に曳かれてラケルの墓前を通り過ぎた時に、ラケルの墓から哭き聲が聞えたとある、是は子孫の殺さるゝを哀む、先祖の心を察して作つた話であらう、この虐殺事件の將に起らんとするに臨んでヨセフとマリヤが早くもイエスを携へてエジプトに遁れた、是はイエスのこの邑を去つた最後で、其後一度もベツレヘムに來た事がなかつた、エジプトより歸つてからはガリラヤのナザレに住み、其處に三十歳に至るまで木匠の生活を送つたのである。

今日のベツレヘムは昔のベツレヘムと左程の變化なく、家屋の構造はエルサレムに似て、一見甚だ陰氣であるけれども、エルサレムのやうに石垣のない爲めか、比較的に窮屈ではないが、矢張人家稠密して居る、道路の狭いのもそれが爲で、人口は八千ばかりもあつて多くはキリスト教徒である、人民が何を營んで生活して居るか

と云へば、農業や商業もあるが最も繁昌して居るのは旅客に土産物を販賣する店である、私がベツレヘムに達するや間もなく、私の馬車の周圍に幾十人となく多くの人が集つて來た、誰れも彼れも皆我にヘンスマンの友人だと云うて私を歓迎して呉れた、ヘンスマンは私の宿つて居る旅館の主人の名である、どうして私がヘンスマンの家に宿つて居るのを知つたのであらう、彼等はいづれも預言者のやうなものだ、今の世には預言者がないと思つて居たが、皆預言者のやうな人ばかりで實に不思議に思つたが、預言者でも何んでもなかつた私の御者の顔を見てヘンスマンの旅館から來たものと知つたので、こんな預言者ならば貴ぶに足らないけれども私の驚いた事が彼等の預言者的知識ではなくして、彼等の親切な事であつた、我々はヘンスマンの友人だから無賃で會堂を案内すると申出た實に親切ではあるまいか、私はエルサレムでユダヤ人を泥坊同様と感じて居つたのであれば、無賃で案内するとの言を聞いて奇妙に感じた、案内するから金を呉れとの事ならば當然の事であるが、無賃で案内するとの事なれば、難有いやうでもあれば氣味の悪いやうでもあつて返事に窮したのである、何となればそんな人が一人や二人ではな

い何十人と云う多数であつたからだ、そして面白い事には彼等同志が私を無賃で案内するとして競ふて喧嘩を始めた如何に愛の教を傳へたイエスの誕生地であればとて喧嘩してまでも旅人を親切するの必要がなるまい、彼等の親切が度を過して居る、親切の人の多すぎた爲に、會堂の見物もゆつくり出來ず、船頭多くして舟山に上つたやうなものだ、實に親切な人の多いのも邪魔なものだ、會堂はイエスの生れた場處に建立されたので、大きい建物ではあるが極質素なものだ、また古い建物で紀元三百三十年にコンスタンテン帝の建立したものだ、其後幾度となく修繕したが、矢張古い會堂であつて、世界の最も古い會堂の一であるとの事である、紀元千百一年の「クリスマス」にはバルドヴィンと云う人がこの會堂でエルサレムの王としての戴冠式を舉行した、この會堂の下にイエスの生れた洞穴がある、長さ四十四呎、幅十六呎、高さ十呎で、大なる蠟燭を燈して居る、其床の中央には銀製の星があつて、「イエスキリストの處女マリヤより生れたるは此處なり」と記載されて居る、私がこの會堂をざつと見て外に出たところが、以前の親切の人々が澤山私を待つて居た、今度は以前のやうに無賃で案内するとは云ない、既に見た後なれば當然の事

であるが、彼等は矢張親切で、今度は我々の家に来れと云うて、互に四方から私を引張つた、日本服ならば裂けたであらうが、幸に洋服であつたから損害を免れたが、御馳走でもするのかと思つたが、そうもでないらしい、日本人だから珍らしがつたのかと思つたが、そうでもない、何となれば私と共に英國人も引張られたからだ、仕方がないから、其中の一人に従つて往つた處が、それは土産物を賣る店であつた、そこで成程無賃で案内すると云うたのは親切から起つたのではない、先づ恩をきせておいて、後で物品を押賣しやうと企たのである、矢張暴利を得んために、一時親切の假面をかぶつたまでいあつた、私が案内料を取られぬ代りに、案内料を幾倍となく取られた、彼等が押賣するので、買ひ度くないものまでも買うやうになつた、一文も残らぬやうに、彼も是もと云うて買つても買つても買はせるゆゑ、餘程強く掛らなければ歸りの旅費までもなくするの虞がある、それ故に私は今後ベツレヘムに往く人々に注意を與へて置く、ベツレヘムに往かはお金をエルサレムに残しおき、小使錢位を携帯するのは最も安全の策であらう、私は押花や、聖書の植物の見本や、荆棘の冠などをかうて來た、残らずで五六圓位よりも買はなかつた、この點に於てはベツ

レヘムの人々を満足させる事の出来なかつのは氣毒ではあつたが、彼等が未だ嘗て見た事のない日本人の顔、即ち戦捷國として唯耳にしたばかりの日本人の顔を見たので非常に悦んだのであつた、勿論私は見料を取らずに見せてやつた、彼等が無賃で案内すると云うても他の方法で金を取らんとしたのであるが、私は徹頭徹尾無賃で見せてやつた、私のこの顔でも其時ばかりは日本人を代表した顔であつた、彼等から云へば日本人と云うものは皆私のやうな顔だと思つて居る、ユダヤ人ももし日本人を描くならば必ず私の似顔だらうと思はれる、私はペツレヘムやエルサレムで大に顔を買つて來た賣つたと云うても價を取つたのではない、多分日本人としての私は今も尙ペツレヘムの人々の間に話の種子となつて残つて居るだらうと思はれる。

卅四 ヨルダンの谷

パレスチナの地理については既に申上げて置いたから御承知でもあらうが、中央部の山地の西には平原あり、東には低い谷がある、この山地も平原もまた其低い谷も

皆北から南へと細長く廣がつて居る、その低い谷を總稱してヨルダンの谷と云うて居る、この谷は南に進むに従つて次第に低くなる、其谷を北から南へ流れて居るの故ヨルダン河であつて、其水源から死海に注ぐ處までは二千五百呎も低くなつて居る、即ち一「マイル」毎に四十呎づゝ低くなる割合なれば、其流の急激なことも察せらるゝであらう、河が眞直ぐに流れず、蛇のやうにうねつて居る、それが證據にカリラヤ湖から死海まで直径六十五「マイル」であるのに、河の長さは二百「マイル」もある、即ち三倍も河が長くなつて居る、この谷には廣い部分もあれば狭い部分もあつて、廣い處は二十五「マイル」、狭い處は僅かに二「マイル」に過ぎぬ、私は前にも申した通り山の上からこの谷を見おろしたのみで、一々廻つて見たのでないゆゑに、詳細に御話申す事が出来ない。

ヨルダン河はパレスチナの河では最も大なるもの、また最も名高い河で、レバノンより流れ來たるゆゑで、雪解けの時には河水溢るゝばかりになる、河の岸には柳が繁茂して居る、ヨルダン河の特質は其岸にある叢くさむらであつて、昔は其叢の中に獅が居つた、聖書にこの叢と獅との關係を記した文句が澤山ある、亞十一〇三に「猛き獅子

の吼る聲ありヨルダンの叢そこなはれたり』とある、耶四十九〇十九に『視よ敵獅子のヨルダンの叢よりのぼるが如く堅き宅に攻めきたらん』とある、新約に『なんぢらの敵なる悪魔吼る獅子の如く偏行て呑べきものを尋ぬ』彼前五〇八とあるのは、ヨルダンの叢から食物をあさるに出で來たる獅子を悪魔にたとへたのである、河の彼岸に小さき枝川が澤山あるが、其中の大きなのはヤボクである、昔ヤコブがパタニアラムより妻子奴婢および家畜を携へて歸つた折りに、彼はこのヤボク附近のヨルダンの淺瀬を渡つた、そして其渡つた當日の夜ヤコブはヨルダンの此岸で神と角力して其名をイスラエルと命せられ、その地をばベニエルと名けられた、其後イスラエル人がヨシアに導かれてこの河を渡つた事は御承知の事である、其時ヨシアの命令に従て祭司等が契約の櫃を昇ぎ、民に先ちてヨルダンに進み、彼等の足の跡ヨルダンの水に浸ると同時に、上より流れ下る水止まりて、民皆エリコに向て濟つた、其時河の底より十二の石を取つて紀念とした、イスラエル人のヨルダンを渡つた後、如何なる事柄が起つたかと云へばエリコの落城である、この城を取るにもイスラエル人が唯エホバの櫃を昇ぎたる祭司の後に従ひ祭司等は喇叭を吹き、

一日一回城を繞り、七日に及んで盛に喇叭を吹きならし大聲を發して呼んだとこそが不思議にも堅固な石垣崩れ、イスラエル人城内に侵入して、老若男女の別なく家畜までも悉く滅しつくし、唯妓婦ラハブの家族と親戚とを救うたのみであつた、邑をば焚き拂ひ金銀銅鐵の器物をばエホバの家の府庫に入れて、戦利品とした、エリコの邑の神に詛はれた事が聖書に記されて居る即ち『凡そ起てこのエリコの邑を建るものはエホバの前に詛はるべし其石礎をすゑるなば長子を失ひその門を建なば季子を失はんと』書六〇廿六、けれども後にエリコが再び建られて豫言者の學校の所在地となつたが、後に建られたエリコは前のエリコとは其位置を異にしたものと思はれる、ロマのアントニーがエリコ並に其附近の沃野をクレオパトラに贈物とした事がある、然るにヘロデ大王は遂にクレオパトラより之を買戻し、エリコを堅固に防禦して避寒の地となし、遂に其處で世を去つたのである、死後間もなく反逆を企たシモンと云へる人の爲にエリコの邑が焼れ、アケラオ更に之を建換へ、水道を敷設して其附近の野を霑ふし、棕櫚の培養に力を盡くし、イエスの當時に在ては甚だ美しき邑となり、イエスも折々この邑に往き、或時は瞽者の目をひらき、

或時は税吏の長ザアカイの饜應を受けた事もあつた、善きサマリア人の比喩を語つたのはエリコとエルサレムの間を旅行して居つた時であつたとの説である、私
がエリコの邑に往かなかつたのは残念であつたが、道路は今でも昔の通り寂しく折々盗賊が出没するから、生來の臆病者が冒險的の旅行を試むる事が出来なかつた、この道に強盜の出没するのは昔のまゝではあるが、善きサマリア人には容易には逢はれない、實に物騒な道である、日本人が組をして泥坊狩でもしたならば、愉快な事であるのみならず、旅人の爲にも安全になるであらうとは思ふたが、如何に日本人がねらいと云うても私のやうな病人一人では何事も出来ない、獨旅の不便を今更のやうに感じたのであつた、エリコの邑は其後ロマのウエスバシアンに滅され、後また建直されて監督の駐在處となり、四五世紀の教會々議にはエリコの監督も出席した、十字軍時代にはエリコの平野は非常に豊饒であつたと云はれて居る、エリコの附近にジベルカランテールと云う山がある、是はマオントコアランタニアとも云はれて居る、其意義は四旬山と云うので、イエスが四十日試誘を受けた山だと傳へられてある、この山には今も澤山の洞穴があつて、盜賊の巢窟となつて居る。

る。
エリコの平野の荒れ果たのは前にも申上げた通り、之を耕やさずに放棄して置くからである、耕やせば外國に奪はるゝの虞あるゆゑ、之を己が領土として保存するには故意に荒らして置かねばならぬ、實に珍らしい維持法もあればあるものだが、荒らして保存したとて保存甲斐があらうか、土地の荒れるのは人民の零落を來たす元因である、エダヤ人の貧困に陥つたのは全く土地を荒らした結果であらうと思はれる、我々はトルコ政府をのみ責むる事が出来ない、トルコ政府をして斯る窮策を取らしむるものが他にあるので、微力なる政府に取つては如何んとも防ぎ方がない、恐なる事とは知りつゝも斯窮策を取つて居るのは如何にも憐むべき次第である、耕やせば農産物を出すの見込充分あれども、荒鷲が飛び來つてそれを喰へつくして了うとの事だ、この聖地を荒らして居る鷲狩も日本人でなければ出来さうもない、この鷲がエルサレムの附近に巢を造つて居るのを私が見た、そして土地の人々がこの鷲を懼れてふるふるへて居るとはなさない話ではないか、ヨルダン河を遠見して思起した事がバプテスマのヨハネの事であつた、彼はこの

河で悔改者にバプテスマを施し、主イエスも其處にヨハネを訪うてバプテスマを受け、爾來ヨルダン河は神聖な河となつた、コンスタンテン帝の時代にヨルダン河でバプテスマを受くる事や、又はヨルダン河の水でバプテスマを受くる事は非常の特權と視做され、六世紀頃にはイエスのバプテスマを受けた場處に大理石の階段を設け、それを降つてバプテスマを受けた事があつた、今日でも時を定めて巡禮が行列を造つてヨルダンに往つて居る、其行列には男女老若の別なく、有志のもの皆それに加はり、驢馬に乗るものもあれば、徒歩するものもあり、婦人は白衣をつけ、男は長い衣を風に吹かせながら進んで行く、私の滞在中にも其行列があつた、それがもしヨルダンに往くのであつたならば私も其行列に加つたのであるが、それはヨルダンから歸つて來たのであつた、日本人を其行列の中に一人加へたならば、其行列も餘程面白かつたであらう、それが出來なかつたのは私に取つても、また其行列に取つても惜しい事であつた。

卅五 死海

ヨルダンの谷を遠望した時には死海をも見たが死海の全体ではなくして其北の半分であつた、南の半分はユダヤの曠野の山に遮ぎられて見る事が出來なかつた、死海には面白い歴史がある、アブラハムの時代にはソドムとゴモラの邑が其邊にあつたが、罪惡の盛なるが爲に硫黄と火とが降り來つて邑の人々を滅し、アブラハムの甥ロトが其滅亡を免れたが、其妻後を顧みたま爲に鹽の柱となつた、アブラハム朝夙に起つてソドムとゴモラおよび低地の全面を望んで煙の騰るのを見た、アブラハムの望んだ低地をば私も望んだが、唯煙のなかつたのが違つたばかりである、この邊には硫黄が多くある、天より降つたのであるのは唯上から降つたと云う意味で火山の破裂であつたらうと思はれる、この邊に別に火山らしき山が見えないが、火山脈のあるのは明である、硫黄を含んだ温泉のあるのは其證據で、死海の東岸にも西岸にも、またその南岸にもそれを發見する事が出來る、ロトの妻が鹽の柱となつたのは鹽に化したのではない、鹽が身に附着したために動かれぬやうになつたのである、この邊の山は鹽に富んで居るゆる死海を鹽の海とも云うて居る、ソドムとゴモラの邑が何處であつたか、是等の邑の滅亡の際に死海が出來たのであらうか、ソド

ムとゴモラの邑が死海の南部であつて、其處が今では全く海になつて居るとの説がある。海となつたとの事には反對する理由がないが、死海の南であつたとの説は疑はしく思はれる。其邑の滅亡の際に死海が出来たとは思はれない。唯死海の一部が出来たであらう。即ち少しく廣くなつたまでであらう。もし其以前に死海が全くなかつたものとすればヨルダン河が何處に流れたであらう。海よりも低い河が何れの海へも流れて行く筈がない。唯死海のみがこの河の注ぐ處であつた。然らばソドムとゴモラの邑は何處にあつたらうか。今日其精密の位地を指示す事が出来ないが、もし死海の中であつたとすれば、南の部分であつたと見るよりも西北の部分であつたと見るのは適當と思はれる。聖書に依れば始めアブラハムとロトの家族とが共に棲んで居つたが、双方の家畜の繁殖した爲に土地の狭きを感じて二人の家族が分離するやうになつた。アブラハムがロトに向て「我等は兄弟の人なれば請ふ我と汝との間およびわが牧者と汝の牧者の間に競争あらしむる勿れ地は皆爾の前にあるにあらずや請ふ我を離れよ爾若し左にゆかば我右にゆかん又爾右にゆかば我左にゆかん」と斯く云はれてロトが自分の行くべき土地を撰まんとした。

聖書に「是に於てロト目を舉げてヨルダンの凡ての低地をのぞみけるにエホバソドムとゴモラとを滅し給はざりし前なりければソアルに至るまであまねく善く潤澤ひてエホバの園の如くエジプトの地の如くなりき」とある。この言に依ればロトがソドムとゴモラの邑のあるヨルダンの低地を望んだ事が明である。それゆゑ彼が何處からその低地を望んだかを極め得るならば、ソドムとゴモラの位地をも極める事が出来る。アブラハムとロトが當時何處に居つたかを定むるにも聖書に依らねばならぬ。聖書に「彼南の地より其旅路に進みベテルに至りベテルとアイの間なる其以前に天幕を張たる處に至れり」とある。即ちロトのヨルダンの低地を望んだのは、ベテルとアイとの附近であつた事は疑ひのなき事である。このベテルとアイとは私がヨルダン谷を眺めた橄欖山よりも遙かに北に位してある。橄欖山から見ても死海の半分以上は見えない。ゆゑ遙かに北から見たとすれば死海の南部の見える筈がない。然るにロトがアイの附近からソドムとゴモラの邑を見たのであれば、それらの邑は今の死海の西北の部分であつたと見ねばならぬ。

『死海』の名は如何にも不思議な名のやうではあるが、名と實とは相一致して居る。

この海には魚類のみか一切の生物が居ないガリラヤ湖を五六倍も大きな海でありながら、生物が居ないからには死んだ海であらう、この海は死んで居るのみならず、他の生物までも殺すの力がある、この海岸に生長する灌木なども花が咲き果が結んでも海から上る蒸發氣の爲に枯死して了うので、恰も霜枯同様である、斯る影響あるを見てこの海の空氣が毒でも含んで居るかのやうに思う人あるが、是は決して人間に害を與ふるものではない、硫黄と鹽分との多い爲めなれば却て人間の健康には適するかも知れない、海の鹽分は年々増加するばかりである、周圍の山には鹽多く隨て山より流るゝ水が鹽分を含んで居る、死海に注いだ水が鹽分を遣して蒸發するゆる山から海に鹽を運ぶ機械のやうなものである、年々鹽分の増加するのも當然である、嘗てダビデがエドム人一万八千人を撃ち殺した事があつたが、其處は鹽の谷と云う處であつた、それはこの海の附近であつたので、鹽の谷とは單に谷の名稱のみではない全く鹽に富んだ谷である、また聖書には鹽邑シハのまちと云う處もあつた、是も死海の附近で鹽の出づる邑を指したのである、この海はヨルダン河より來たる魚を殺すの力を有つて居る、それゆる死海が他の物までも殺して己れ

に同化するが、獨り人間に取つては他の海よりも危險が少ないとの事である、それは何故かと云へば決して人を溺死させないからである、そんなに水練を知らぬ人と雖もこの海では溺死する事が出來ない、落ちて身も沈みやうがないからだ、木片を投ずれば恰も鏡の上に置いたやうだとある、鏡の上で溺れた人のある筈がない、それでこの海の如何に鹽分に富んで居るかを知らぬ事が出來る、尙その上益鹽分が増加するのみなれば、終には死海全体が結晶して鹽の塊となるかも知れぬ、私が死海に鹽分の多いのを聞いたゆゑ、其附近に食鹽製造場でも造つたらばどうかと或人に云うたら、鹽の製造の必要がない、誰でも山から自由自在に鹽を取る事が出來ると云うた、それでも其儘に棄て置くのは何となく惜しい氣がするが、手を付すに放棄して置かねば、前にも云うたやうに鷲の災を防ぐ事が出來ない、鷲が鹽を喰へるとは未だ聞いた事がないが、餓ゆれば喰べないとも限るまい、一種變つた鷲なれば何でも喰へるかも知れない、悪い鳥もあつたものだ、橄欖山から死海を望めば、恰も富士山から三日月湖を望んだやうで、非常に低く見ゆる、橄欖山は海から二千七百呎も高い處で、死海は海から一千三百呎も低いから、私は四千呎の下に死

海を見たのである。是は世界中最も低い海である。裏海は海面より八十四呎低い。アフリカの東海岸にあるアサル湖が七百呎低い。されば死海に及ぶものがない。この死海には色々な名があつて、或は鹽の海と云ひ、或はアラバの海と云ひ、或は東の海とも云うて居る。是は地中海のを西海と云うに對しての名である。「タルマツト」書にはソドムの海とも云うて居る。アラビヤ人は之をバルロトと云うて居る。その意味はロトの海と云う事である。この海は地中海よりも千三百呎も低い。それは水面までの事であるが、水面から海底までは更に千三百呎もある。この深い海全体が鹽の結晶体と化したならば餘程の價のものだが、百年や二百年では結晶も出来まい。この海の東西共に山で、南の方も高いゆる大海に通ずる路が絶へて居る。昔はそれでも紅海と通じて居つたとの説で、それは眞であつたかも知れぬ。死海の水面が今よりも千四百呎も高かつた跡か遺つて居る。其時代にはヨルダンの谷が湖水であつて、水が紅海に流れたのであらう。今斯くも低くなつたのは氣候炎熱の爲に蒸發の速かなるに元因したのであらう。この谷は熱帶の氣候で砂漠から熱風の吹き來る時は四月の午後八時頃ですらも百六度に上り夏季は土着のアラビヤ人の外は凌げ

ないこの事である。

死海を隔てモアブの山を眺めた時には、ネボーの山も其中にあるだらうと思つた。モーセがカナンの地を望見したピスガの峯と云うのはネボーの山である。モーセは四十年の間頑迷なイスラエル人を率てアラビヤの砂漠を漂泊し、ピスガの峯に登つて約束のカナンを望見した時には、どんなに悦んだであらう。神は其時にモーセをしてギレアドの全地をダンまで見せしめ、ナフタリの全部、エフライムとマナセの地およびユダの全地を西の海まで示し、南の地と棕櫚の邑なるエリコの谷の原をゾアンまで望ませ、而して彼に向て「我がアブラハム、イサク、ヤコブにむかひてを汝の子孫にあたへん」と言ひて誓ひたりし地は、是なり。我なんちをして之を汝の目に観ることを得せしむされど、汝は彼處に濟りゆくことを得ず」と云うた。モーセはそれを見た丈で満足して死んだ。其時彼は百二十歳であつたが、目も朦朧らず、氣力も衰へなかつた。ある神はモーセの死体をモアブの地の谷に葬つたが、何人も其葬られたる地を知るものがなかつた。斯る歴史上の事蹟を思ひながら、其壯觀な景色を眺望すれば、モーセの當時の感慨をも幾分か察せられ、聖書の歴史が活きて

見えるやうに感ぜられた世界廣しと雖どもパレンステナ程歴史的興味に富んだ景色があるまい、そしてこの雄大なる眺は神の子の目に映じた同じ眺めであつた事を思へば嬉しくもありまた不思議でもある。

(卅六) ユダヤの曠野

ユダヤの曠野は昔からの荒地で何の役にも立たぬ地ではあるが、それは農業家から見ての事で、歴史家や宗教家から見れば、この荒れ果た砂漠同様の地でも中々興味ある處である、この曠野を私は廻はつて見たのではないが、一度は橄欖山から見おろし、一度はベツレヘムの途中から眺めた事があつた、實に物凄い景色である、ユダヤの曠野と稱せられて居るのは餘程の廣い區域で、北はエリコの附近から始つて、死海の西海岸に沿うてヘブロン^{ヘブロン}の邊に達して居る、その東西の幅は十五「マイル」から廿五「マイル」に達して居る、その南北の長さは三十「マイル」にも上つて居る、それは随分廣い面積である、曠野と云へば平原のやうに思はるゝか、そうではなくして秃山の集つた處である、山と山との間には深い谷があるが、常に水が流れて居るの

ではない、唯降雨の時のみ水が流れるので、常には全く涸れて居る、土がなくて石のみなれば、樹木の無いのは勿論のこと、灌木すらも見られない、山も峻しい岩山なれば容易に登る事も出来ず、唯鳥や獸物の棲所となつて居るのみであるが、それでも曠野の或地を撰んで生活して居つた人もあつた、この物凄き曠野が却て其人々の生活に取つては繁華な都會よりも便利であつた、然らばどんな人々が好んでこの曠野に住んだかと云うに、それは「エセンス」派の人々であつた、彼等は「パリサイ」人や「サドカイ」人とは違つて厭世的の人々で、政治上には全く希望を絶つた輩であつた、國家の救に絶念したゆゑに唯己れ一身の救を全うする事に全力を込め、「パリサイ」人も三舍を避くる程に規則を嚴重に守つて、一身の救を全うしやうと努めて居つた、彼等が都會の生活を捨て曠野に退いたのは一身を潔むる爲めであつた、彼等は洞穴に生活し、妻を娶らず、粗食粗衣を撰み、世の奢侈を一切棄て、仙人的生活を樂んだ、その避けんとした不潔は道德的のものばかりではない、物質的のものもあつたので、毎日二三度沐浴したのは物質的不潔を避けんが爲である、この點に於ては今日のユダヤ人とは雲泥の相違である、沐浴するにも衣服を着換へるにも一定の時

があつて嚴重に其時間を守り、晝には土地を耕し、又は家畜を收ふて己れらの用に供し、賣買を避け、貨幣などには手も觸れなかつた。是は清貧を貴んだ爲ではなくして、貨幣に肖像があつたからだ。その肖像のある爲に十誡の第二誡に違反する事と信じたのである。其派以外の人々と絶交したのは汚かざるゝを懼れた爲である。其派に加入せんとする人があつても、三年の後にあらずは潔きものとは視做されない。その三年間は即ち規則を守ることにの修業時間である。安息日を堅く守り、聖書を研究し、品行も方正であつた。この點に於ても、パリサイ人や、サドカイ人の及んだものではない。其派に加入せんとするには誓約を立てねばならぬ。即ち神を崇め、人に對しては不義を行はず、信實にして權威ある人に従ひ、眞理を求め、虚欺を發き、正直にして物を盗まず、不正の利を求めざるを誓約するのである。またこの派の人々は財産を共有し、奴隷を禁じ、戦争を憎み、肉食を避け、方正の生活を送つたものである。が、道徳的の不潔と、儀式的の不潔とを混同したのは其欠點である。彼等の住んだ處がユダヤの曠野の東部であつた。

「エセンス派以外の人でありながら尙ユダヤの曠野に住んだ人があつた。それはバプテスマのヨハネである。彼が餘程永く曠野に住んだものと見え、聖書に彼について左の如く記されて居る。『斯て嬰兒は漸成長し精神ますます強建にしてイスラエルに顯るゝ日まで野に居れり』と、外見より云へば彼は、エセンス派の人に似た處があつたが、其精神より云へば雲泥の相異があつた。エセンス派の人々は單に自己の救を全うせんが爲に世を避けたものではあるが、ヨハネはイスラエル人を救はんが爲に自ら修養したのである。イスラエル全体を導いて神民たる精神的資格を備へしめんと努めたのはヨハネの事業の目的である。エセンス派の人々の中には斯る大失望を懷いたものが一人もなかつた。ヨハネがエセンス派に加入しなかつたのは當然の事で、ヨハネの理想は、エセンス派のそれと全く反對であつた。彼はまた儀式に拘泥して精神的に死せる、パリサイ派にも加入せず、彼等の偽善を譴責して悔改を促した。サドカイ派も亦ヨハネより見れば蠅の裔で、神の怒を蒙るべきものである。されば彼は單身孤立してユダヤの曠野に居つたのは故ある事で、彼はメシアの來るを望み、その先驅者を以て自ら任じ修養しつゝ、その時機の至るを俟つた。身には駱駝の毛衣をき、腰に羊の皮の帯を結び、蝗蟲と野蜜とを食物として克己

の生活を送り、その精神を練ると同時に神の道を學んでメシアの出現を俟つて居たヨハチの人物はこの曠野に似て凄味があるのも自然である。曠野には洞穴があつて、其中には蝙蝠が棲んで居る、其外様々の蛇も居つたのでヨハチがユダヤ人の偽善を指して蝮と云うたのは、彼が洞穴で常に居て居つた蝮から思ひ付いたのである。

曠野の東端、即ち死海の西岸に沿うた地で、死海の北端より廿五マイルも南に進んだ處に、邑の跡が残つて居る、是地は稀に見る程の美しき地で、聖書にエンゲデと云はれた處である。雅歌に「己が愛する者は己れに取てはエンゲデの園にある」コペルの英華のごとし「二〇十四」とある、この言で見てもエンゲデの豊饒な地であつた事が知れる、昔ユダの王ヨシヤバテの時にユリアの軍勢がこのエンゲデまで攻寄せた事があつたヨシヤバテは大に懼れ、全國に布告して斷食を行はしめ、王自ら神の室の前に立つて「我等の先祖の神エホバよ汝は天の神にましますにあらずや異邦人の諸國を統たたまふにあらずや汝の手には能力あり、權勢ありて誰もなんぢを禦ぐこと能はざるにあらずや云々」と云ひて助を祈つた事がある。

この地の豊饒であるのは泉のあるが爲だ、エンゲデとは野羊の泉と云う義で、泉が恰も野羊の躍るが如くに、岩から岩へと流れ落つるが爲である、このエンゲデにもまた色々の歴史がある、其中の重なる事はダビデとサウルの事である、サウルがダビデの人望あるを嫉んで之を殺さんと欲したがダビデがはやくもサウルの心を察し、其手を遁れんとして處々の洞穴に潜伏した、然るにサウルがダビデのエンゲデの野にあるを聞き、三千人を率てダビデを探索せんとてエンゲデに來り、ダビデの潜伏して居る洞穴に休息した、素よりサウルが其洞穴にダビデの居るとは夢にも知らなかつたが、ダビデが早くも其サウルなるを知つた時にダビデの從者がサウルを殺すの機會は今なりと云ひて、ダビデにサウルを殺さんことを促したが、ダビデは斷然之を拒み、サウルの眠れる間に彼に近寄りて其衣の裾を切り取つた、その衣の裾を切り取つた事すらもダビデが悔ひた即ちエホバの啓をよきしものにして斯る事を行ふの善らざるを悟つた、けれども從者がサウルを以て主人の仇なりと思つた故に、彼を殺さんとしたが、ダビデに止められて、其志を達する事が出来なかつた、サウルはダビデの居つた洞穴とは知らず、其儘出て去つたが、ダビデも彼の後

を追ふて洞穴を出た。サウルがダビデの己が後に従へるを知らずに居つたが、ダビデが後よりサウルを呼んだ。サウル呼ばれて後を顧みしに、ダビデが地に伏して拜しながら其冤罪を訴へ、且つサウルを殺すの機會あれどもエホバの膏を、いだ王に敵するの不忠なるを宣へ、其手にある木の裾を示し、裾を切り取る程の機會のあつたにも拘はらず、殺さざりしは殺すの意のなき證據なる事を見せ我と汝との間をさばくものは神なり、汝の手より我を救ふものも神なりと云うた時に、サウルがダビデの精神の潔白なるに感じ、我が子ダビデよと云ひて聲を擧げて哭いた。そして我は汝に惡をむくゆるにも拘はらず、汝我に善をむくひ、汝が我に對して惡意なきを示せるは我が悦ぶところである。エホバ必ず汝を恵んで王となさんと云ひて、己が家の將來の事をダビデに頼んで相別れた事があつた。

エンゲデと死海の南端との間に、マサダと稱する處がある。是は要害堅固な處で、恰もジブラルターの天險に類して居る。昔この地がマカベ一家の城砦であつて、其後ヘロデ大王が更に防禦を嚴にし、到底破る事の出來ざる堅牢無比の城砦とした。東南北の三方は海に臨み、しかも懸崖絶壁であれば、この城砦を攻むるには唯西の一

方のみ残つて居る。然るにヘロデ大王が西の方面に非常に高く且つ厚き石垣を築き、塔を作つて防禦を嚴にした。城砦中には岩を掘て水を貯へ如何に永く包圍さるゝとも水に渴する憂なきやうに準備し、其他武器庫を建築し、王自身も其中に籠るの便利を圖て王宮までも建築した。けれどもヘロデの存命中には一度も戦争なくして濟んだが、ヘロデの死後に及んで大悲劇が演ぜらるゝやうになつた。エルサレムがロマの軍勢に圍まるゝ前には、此城砦はエレアザルと云う人の所有であつた。其後エルサレムがロマの大將タイタスに亡されたが、このマサダ城が陥落せず居た。そこでフラヴィアスシルバと云へるロマの大將がこの城砦の攻撃を始めたが、ヘロデの設計が此時に及んで功を奏し、如何に攻撃を加へても抜く事が出來なかつた。それ故に敵も攻撃の手段を易へ、城内に飢饉を起させんと目的を以て交通遮断を企て、城内より出づる事の出來ぬやうにした。其結果遂に飢饉となり、それが爲に城内の勢も大に弱り、其機會に乗じてフラヴィアスが石垣を破壊し始めたが、ユダヤ人が直ちに内側に防禦工事を起して之を防いた。然るにロマ兵は更に火を放ち翌朝ヘロデの王宮を焼拂ひ、石垣を破つて城内に進入したが、不思議にも城内寂として一人の敵も居ない。怪み居る間に一人の老女と五人の小兒が走り出で

城内の慘狀を羅馬兵に語つた其語る處に依れば抵抗を繼續するの無効なるを知り、饑渴に迫れるユダヤ人が捕虜となるを懼れ、皆自殺する事に心を定め、ヘロデ王の一切の寶物を火中に投じ、然後夫妻互に刺し合ひ、夫は妻を刺し、妻は夫を刺し、後に残つた人々が鬪を以て十人を選定し、この十人に己れ等の首を斬らせ、この十人も亦其中の一人を選んで九人の首を斬らせ、最後の一人が自ら刃に伏して死し、斯くして九百六十人の男女が死んだとの事を物語つた。ユダヤ人の最後を物語つた老婦女と小兒等が其時に見落されたものであつた。この勇しい最後を遂げたのを見ればユダヤ人も思はれぬ程の花やかな事で、恰も日本の軍談でも讀むやうな心地がする今日のユダヤ人には夢にも斯る勇敢なる精神を見る事が出来な

い。今のパレスチナのユダヤ人は生きながら死んで居る、物質的方面より見ても、また精神的方面より見ても生きたものとは思へない。亡國の民と云うよりも亡國の亡者と云うのは適當であらう。神の民と誇つたイスラエル人の末路も亦憐なるものである。

埃及及
旅行談終

明治三十九年十月十九日印刷
明治三十九年十月廿二日發行

定價金五十錢

著者 山田寅之助

東京府豊多摩郡青山南町七丁目一番地
青山學院構内

發行者 堀田達治

東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷者 ゼー、エル、カウエン

東京市京橋區銀座四丁目一番地

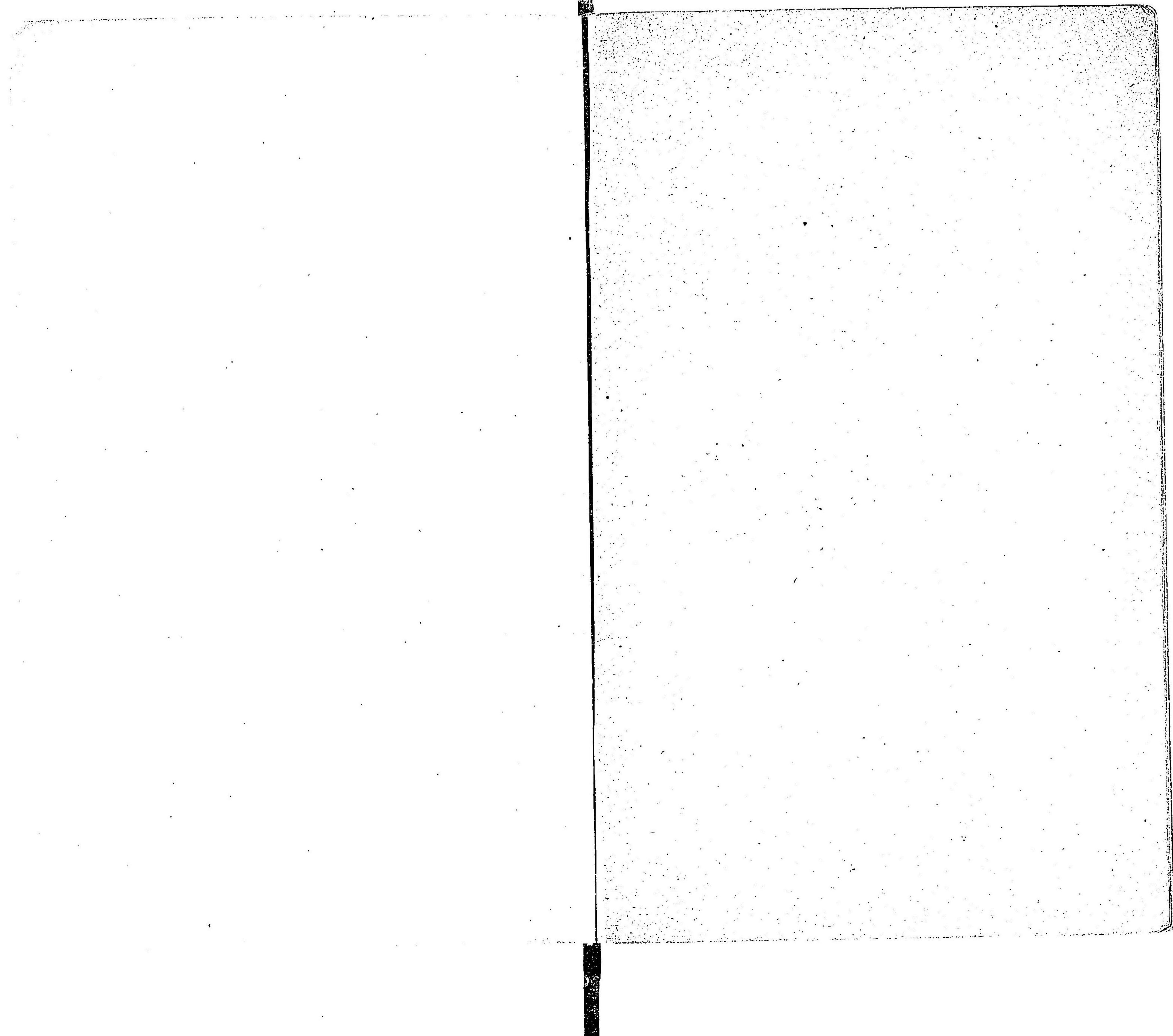
發行所 教文館

東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所 教文館印刷所



不許
複製



23/5/27
19/12

